

北奥遺跡（第3次）発掘調査報告

－三重県津市芸濃町多門－

2010（平成22）年10月

三重県埋蔵文化財センター

例 言

- 1 本書は、三重県津市芸濃町多門にある北奥（きたおく）遺跡の第3次発掘調査の報告書である。
- 2 調査の原因は、平成21年度の（主）津芸濃大山田線道路改良事業である。当該にかかる費用は、三重県県土整備部が負担した。
- 3 当該調査及び整理体制は下記のとおりである。

調査主体	三重県教育委員会
調査担当	三重県埋蔵文化財センター
	調査研究 I 課 主査 岩脇成人、奥田勝久、西村美幸
発掘作業受託	日本海航測株式会社
調査期間	平成21年8月28日～11月10日
調査面積	300㎡
- 4 調査にあたっては、地元津市芸濃町在住の皆様、三重県土整備部道路整備室、津建設事務所のご協力を得た。
- 5 本書の執筆は目次に示し、全体の編集は岩脇成人が行った。
- 6 本書に使用した事業計画図面は津建設事務所の提供による。
- 7 本書で報告した記録類および出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターで保管している。
- 8 本書で報告した遺跡の位置は、平成14年4月から施行されている世界測地系による新座標で表記し、図面における方位はすべて座標北で示している。
- 9 土層・遺物の色調は、「新版 標準土色帖」（農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所色票監修1997年版）を用いた。
- 10 本書に用いた遺構表示略記号は下記にある。
SE：井戸 SK：土坑 SD：溝 SZ：谷状遺構

目次

I.	前言	（岩脇成人）	1
1	調査に至る経緯		1
2	調査の経過		1
3	調査区の設定		1
4	文化財保護法にかかる諸通知		1
II.	位置と環境	（岩脇成人）	2
1	地理的環境		2
2	歴史的環境		2
III.	遺構	（岩脇成人）	5
1	基本層序		5
2	遺構		5
IV.	遺物	（岩脇成人）	12
V.	自然科学分析		21
1	塗膜分析	（山田卓司〔(財)元興寺文化財研究所〕）	21
2	樹種同定	（木沢直子〔(財)元興寺文化財研究所〕）	22
VI.	結語	（岩脇成人）	24

挿 図 目 次

第1図	遺跡位置図	3	第9図	SD317、SE325・327、SK301・304・306 出土遺物実測図	13
第2図	遺跡地形図	4	第10図	SK303・307・308・311・312・319 ・322・324、SD329出土遺物実測図	14
第3図	調査区位置図	4	第11図	SD302・321、SZ331、包含層 出土遺物実測図	15
第4図	調査区2平面図	6	第12図	漆塗椀(7)のXRF結果	21
第5図	調査区1平面図	6	第13図	漆塗椀(8)のXRF結果	22
第6図	調査区土層断面図	7			
第7図	SE325・327実測図、SD321土層図	8			
第8図	SK319・322実測図	10			

表 目 次

第1表	遺物観察表	17	第4表	漆塗椀(8)〈赤色部分の採取片〉の XRF結果	22
第2表	分析対象資料および分析内容	21			
第3表	漆塗椀(7)の赤色部分における XRF結果	21			

写 真 目 次

調査前風景	25	出土遺物	29
調査区1全景	25	出土遺物	30
SE327	26	出土遺物	31
SK322	26	漆塗椀(7)	32
調査区2全景	27	漆塗椀(8)	32
木製椀(7)出土状況	28	木材組織顕微鏡写真	33
木製椀(8)出土状況	28	木材組織顕微鏡写真	34
SE325	28		

I. 前 言

1 調査に至る経緯

北奥遺跡は、津市芸濃町雲林院字井ノ上から多門字北奥に所在する遺跡である。当遺跡は今回の調査までに2回の発掘調査が行われている。第1次発掘調査は昭和63年度に県営ほ場整備事業に伴い行われた。調査は3箇所で行われ調査面積は4,600㎡で、奈良時代から室町時代の集落跡や遺物が確認されている^①。

平成14年に行われた第2次発掘調査は、(主)津芸濃大山田線道路改良事業に伴う事業として行われた。本路線は津市中心部(国道23号線)から津市安濃町、芸濃町を経て、伊賀市大山田村(国道163号)に至る幹線道路で、日常生活及び産業経済活動にとって欠くことのできない総延長29.2kmの重要路線であるが、多門集落内では、幅員が狭小なため交通に支障をきたしてきた。そのため、多門集落をぬける箇所を迂回しバイパスを建設する事業が進められた。平成13年12月17日に事業計画予定地内で当センターが路線内の7箇所を確認調査を実施し、遺跡内で柱穴、溝などの遺構が発見され事業計画内の1,000㎡について本調査が必要と確定された。本調査は芸濃町教育委員会が主体となり三重県埋蔵文化財センターが協力する体制で実施され、平成14年7月2日から開始した。その結果、中世集落の縁辺部の状況が明らかになっている^②。

今回の第3次発掘調査は第2次調査区の西側に隣接した区域が対象となった。第2次調査区で検出された遺構が西側に続き、さらに西方の第1次調査区まで広がることが確認されるため、確認調査は行わず、事業実施予定範囲の全域で本調査に入った。

2 調査の経過

平成21年9月1日に現地での調査手順等についての検討を行い、10日に現況の写真撮影を行った。16日に調査区2、17日には調査区1の表土掘削を重機により行い、24日からは調査区2の人力掘削を開始した。調査区2の遺構検出完了に伴い、10月1日か

らは調査区1において人力掘削開始し、両調査区並行の作業となった。雨天による調査作業中止の日が多かったほか、台風による出水の影響や崩落もあり、遺構の確認や掘削作業が大幅に遅れたが、10月13日に調査区2の全景撮影、19日には調査区1の全景撮影を終了し、実測作業にはいった。10月16日には撤収作業を開始し、11月10日に終了した。

3 調査区の設定

道路を挟んで発掘調査箇所が2箇所に分かれたため南側を調査区2(50㎡)、北側を調査区1(250㎡)として調査を行った。発掘調査にあたり4m×4mの世界測地系に基づいた両調査区共通の方眼(グリッド)を設定し、調査の基本単位とした。

4 文化財保護法にかかる諸通知

文化財保護法等にかかる諸通知は、以下により県教育長宛に行っている。

- ・ 文化財保護法に基づく三重県文化財保護条例第48条の1項(県教育長宛)
平成21年8月31日付け津建第315号
- ・ 文化財保護法第99条の第1項(県教育長宛)
平成21年8月28日付け教埋第212号
- ・ 遺失物法による文化財発見・届出通知(津警察署長宛)
平成21年11月11日 教委12-4412号

〔註〕

- ① 三重県埋蔵文化財センター『安濃川中流域の考古資料』研究紀要第15-13号 2006(平成18)年3月
- ② 三重県芸濃町教育委員会『北奥遺跡発掘調査報告』2003.3

Ⅱ．位置と環境

1 地理的環境

北奥遺跡（1）は三重県のほぼ中央部にある高峰、経ヶ峰（2）の麓にあり、安濃川中流右岸の河岸段丘上に位置する。当地の標高は約66～68mで、北側を流れる安濃川に向かって緩やかに傾斜している。遺跡の250m南方で安濃川が丘陵に迫り、その狭隘部に多門集落が存在する。この集落は江戸時代初期に出来た新村で、雲林院村の出屋敷が発展したものとされている^①。当遺跡の北西側は段丘面が広く水田が広がり、当遺跡の現状も水田または畑地である。

2 歴史的環境

当遺跡の周辺には、縄文時代から中世に至る遺跡が多数確認できるが、なかでも中世の遺跡が充実している。安濃川の対岸に位置する大石遺跡（3）では平成3年に発掘調査が実施され、平安時代末から鎌倉時代の堀を伴う掘立柱建物群が確認されている。当地域の有力者の屋敷に相違なく、地頭階級の屋敷跡と推測されている^②。やや下流の棕南南方遺跡（4）・松山遺跡（5）でも、昭和62年に発掘調査が実施され、奈良時代から鎌倉時代に至る広大な集落跡が確認されている^③。

一方、安濃川の右岸側でも北奥遺跡の第1次調査で平安時代末から鎌倉時代の集落跡が検出されており、耳皿の出土が注目される。この様に、平安時代末から鎌倉時代にかけてこの地域に有力者が居を構え、集落が安濃川の両岸に及ぶ広範囲に広がっていたことが想定できる。

中世城館としては、当遺跡の西方約3kmに雲林院城（6）がある。雲林院城跡は雲林院集落西方の標高約250mの山頂にあり堀切や土塁が残存している^⑤。さらに麓の雲林院集落内には一段高い畑や入り込む低い水田、字名の「堀」等から館跡（7）が推定され^⑥、山頂の詰城と対になる大規模な城館として機能していたようである。さらに安濃川の対岸には野呂氏館跡（8）が三方の堀や土塁を残している^⑦。南方では、前山城跡（9）が経ヶ峰への登り口にもあた

る位置に堀や土塁を巡らせている^⑧。野呂氏館跡より北方へ行くと、林城山城跡（10）、林城屋敷城跡（11）、楠原童子谷城跡（12）・楠原向市場城跡（13）等、多数の城館が分布している。しかし、林城山城跡は、開発によりほぼ消滅、楠原向市場城跡は土塁が残るものの半壊している。

ところで、この頃の良い遺跡が、当遺跡の西方、雲林院城が所在する丘陵の麓に広大な面積を占める下川遺跡（14）である。発掘調査によると戦国時代を中心とする遺跡で、掘立柱建物、区画溝、井戸などが検出されている^⑨。この時期の遺構は北奥遺跡まで広がっており、このことから城を中心とした中世集落が雲林院城に隣接する広大な下川遺跡から北奥遺跡にかけて展開されていたことが考えられる。さらに、大和手搔派の包永の末流とされる包長などが作刀した場所と考えられ^⑩、四日市市立博物館が所蔵する槍（県指定文化財）には「雲林院 住 包治」の銘があり、刀工集団の所在を裏付けている。

近世にはいと津藩領となり、出屋敷として多門集落が発展する。寛文9年には久居藩領に属し^⑪近代をむかえるのである。

【註】

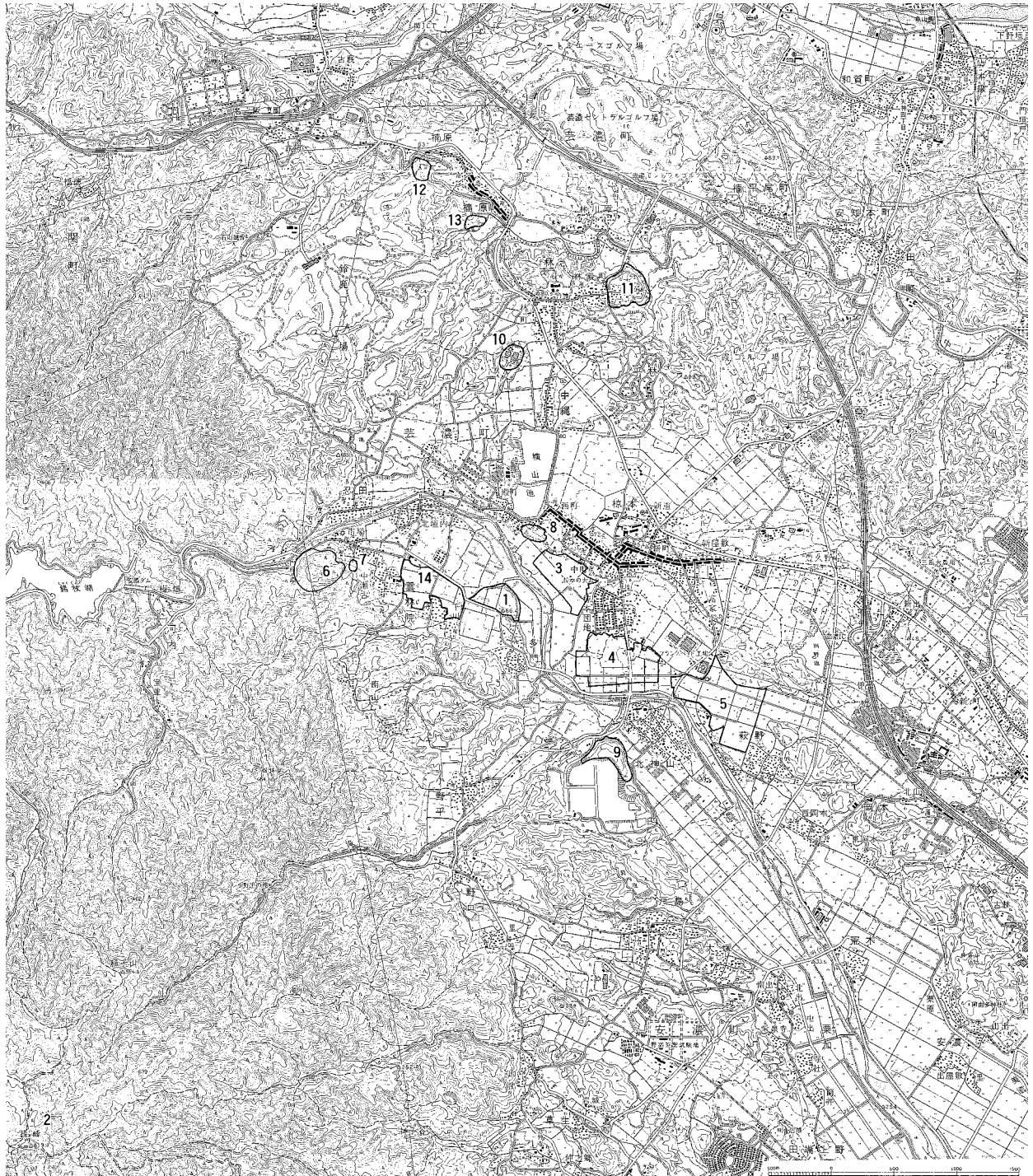
- ① 下中邦彦編集『三重の地名』株式会社平凡社 1983.5.20
- ② 三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター『平成3年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』1992.3
- ③ 三重県教育委員会『三重県埋蔵文化財年報18』1988.3
- ④ 三重県埋蔵文化財センター『安濃川中流域の考古資料』研究紀要15-13号 2006（平成18）年3月
- ⑤ 三重県教育委員会『三重の中世城館』1976
- ⑥ 芸濃町教育委員会『芸濃史上巻』昭和61年6月30日
- ⑦ 芸濃町教育委員会『野呂氏館発掘調査報告』1984.3
- ⑧ 前掲⑤に同じ

⑨ 三重県埋蔵文化財センター『伊勢寺廃寺・下川遺跡
ほか』1990.3

⑪ 前掲⑥に同じ

⑫ 前掲①に同じ

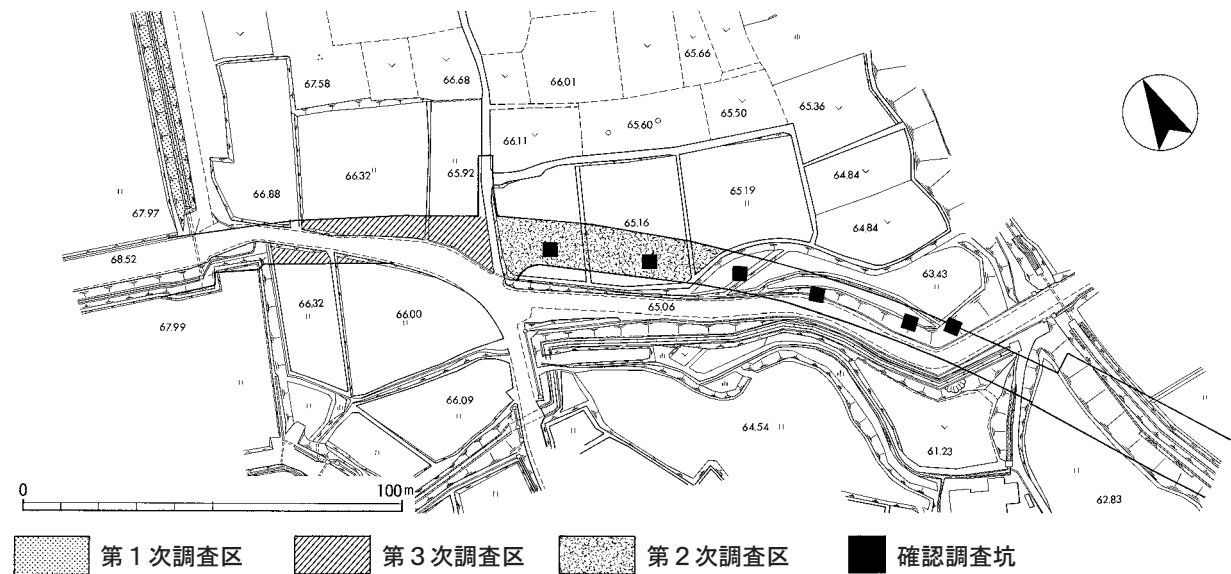
⑩ 前掲④に同じ



第1図 遺跡位置図 (1:50,000) [国土地理院「棕本」「亀山」1:25,000より作成]



第2図 遺跡地形図 (1 : 5,000)



第3図 調査区位置図 (1 : 2,000)

Ⅲ. 遺 構

1 基本層序

調査区の土層断面図は、調査区1の北壁及び西壁、東壁、調査区2の南壁及び西壁を図示した。

(1) 調査区1

現況は畑であるが元来は水田と考えられる。厚さ15～20cmの耕作土(1)の下に同様な厚さの床土(2)があり、その下が黒色粘質土(3)で包含層に相当する。この層が落ち込み遺構埋土を形成しているが、一部の遺構は黒色粘質土(3)上面から切り込んでいる。遺構検出は、この層直下の褐色粘質土(28)上面で行い、表土からの深さは約35cmである。

東側は一段低く、25cm下がる段差がある。床土(25)は10cm足らずの薄いもので、その下には暗オリーブ褐色粘土(26)、さらに厚さ20cmほどの暗オリーブ褐色砂質土(27)が加わる。両者の差は微妙であり、両者を合わせて包含層とすべきものである。検出面は、谷状遺構S Z 331に向かって緩やかに傾斜し、それに連動して暗オリーブ褐色砂質土(27)が厚さを増す。

(2) 調査区2

現況は水田で、厚さ25cm程度の耕作土(1)の下に厚さ10cm足らずの床土(2)、その下に厚さ50cm前後の砂が混じる暗灰黄色土(4)があり、これが包含層と考えられる。遺構検出はこの層の直下のにぶい黄色粘土(11)上面で行い、表土から75cmの深さである。調査区1と同様に東へ向けて緩やかに傾斜し、東側では耕作土から検出面までは1mを測る。包含層が落ち込み遺構埋土を形成する状況等は調査区1と同様で、東側では暗灰黄色土(4)の他に黒褐色土(5)が加わり、これも包含層と考えられる。

2 遺構

今回の調査では、井戸2基、土坑17基、溝7条の他、多数の小穴が確認できた。時代別に分けると奈良時代の溝1条の他は中世に属するものである。掘立柱建物にまとまるものはなかったが、後述する根

石を伴う柱穴状土坑S K 311や柱根(138・139)を伴う小土坑もあり、掘立柱建物が存在した可能性は大きいものと思われる。

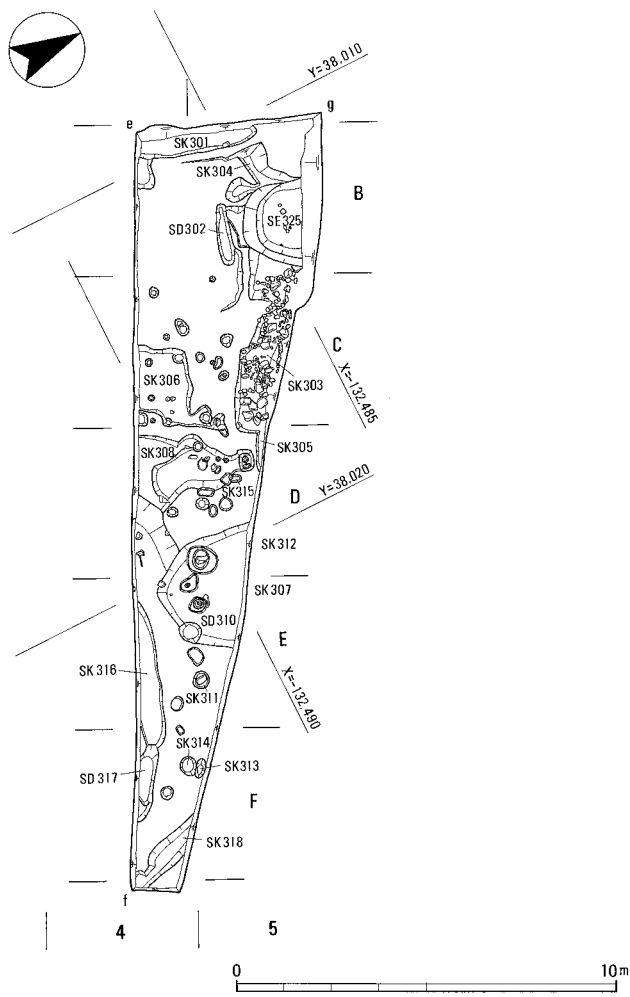
(1) 井戸

SE 3 2 5 (第7図) 調査区2北西部の調査区端で確認した。遺構検出の段階では、S K 303に伴うと考えられる密集した石群に覆われていた。それを取り除くと円形の暗褐色砂質土が確認され、掘削した結果、検出面からの深さ75cmの土坑状の遺構となった。平面形は隅丸方形と推測され、この深さで湧水点に達していることから井戸と考えられる。埋土は3層で最上層は砂質土、最下層が粘質土であるが還元していない。中央部で直径1mほどの砂質層を両層の間に挟み込む。この部分が井戸本体の大きさを示しているのかもしれない。内部から土師器皿・羽釜・鍋と山茶碗、陶器甕、木製品の碗・鉢等が出土した。木製の碗2点は横倒しの状態で、鉢は伏せた状態で出土したが底から浮いた位置で残存土も低く、埋納とは考えられない。出土した土師器皿の特徴から室町時代の井戸と推測される。

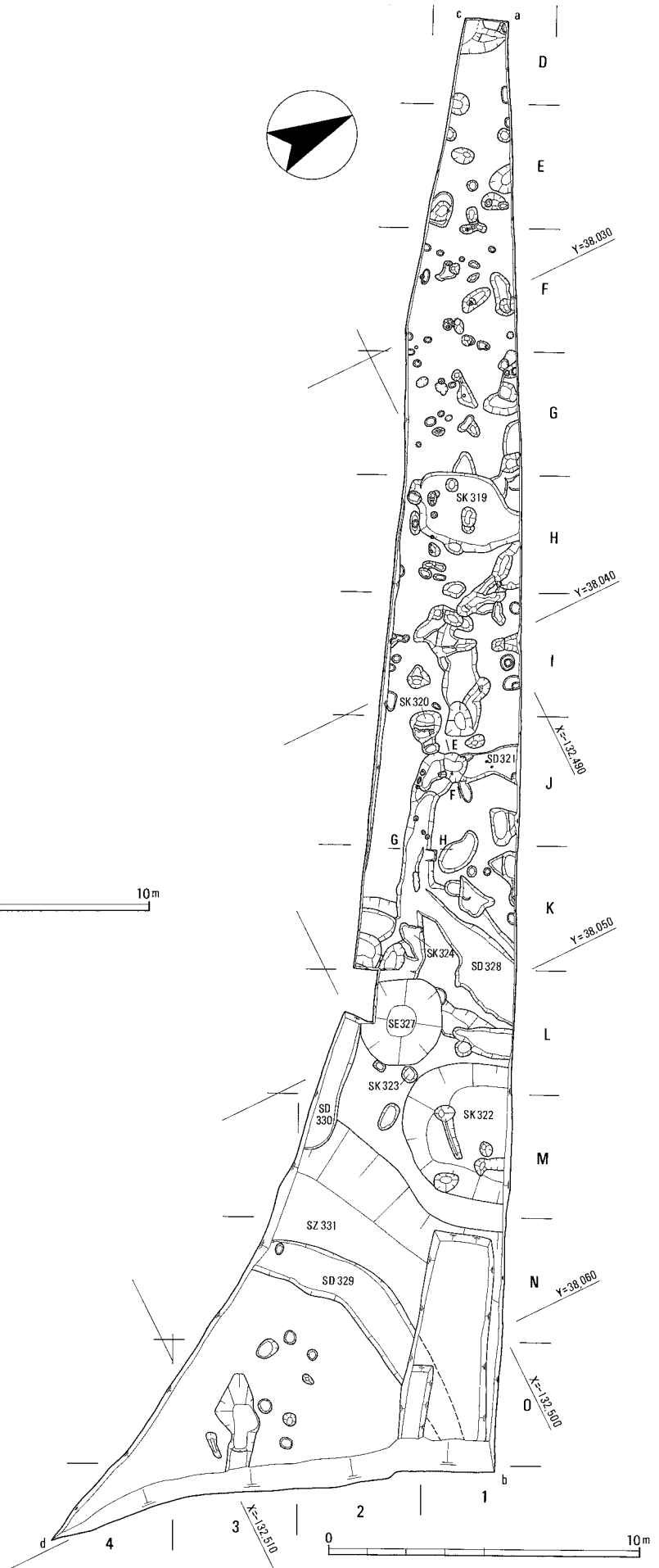
SE 3 2 7 (第7図) 調査区1の南東部で確認された。直径約1mの石組井戸で、堀形は南端が調査区外のため不明確な部分もあるが、直径2.7mの不整円形を呈する。危険を考慮して掘削を2.5mまでで中止したため、深さは確認していない。埋土は長径30cm前後の石が充満する状態であった。出土した遺物としては土師器の皿、鍋、羽釜などで、室町時代の井戸と思われるが、須恵器甕や山茶碗の混入の他に近世の鉄釉壺片が1片出土している。

(2) 土坑

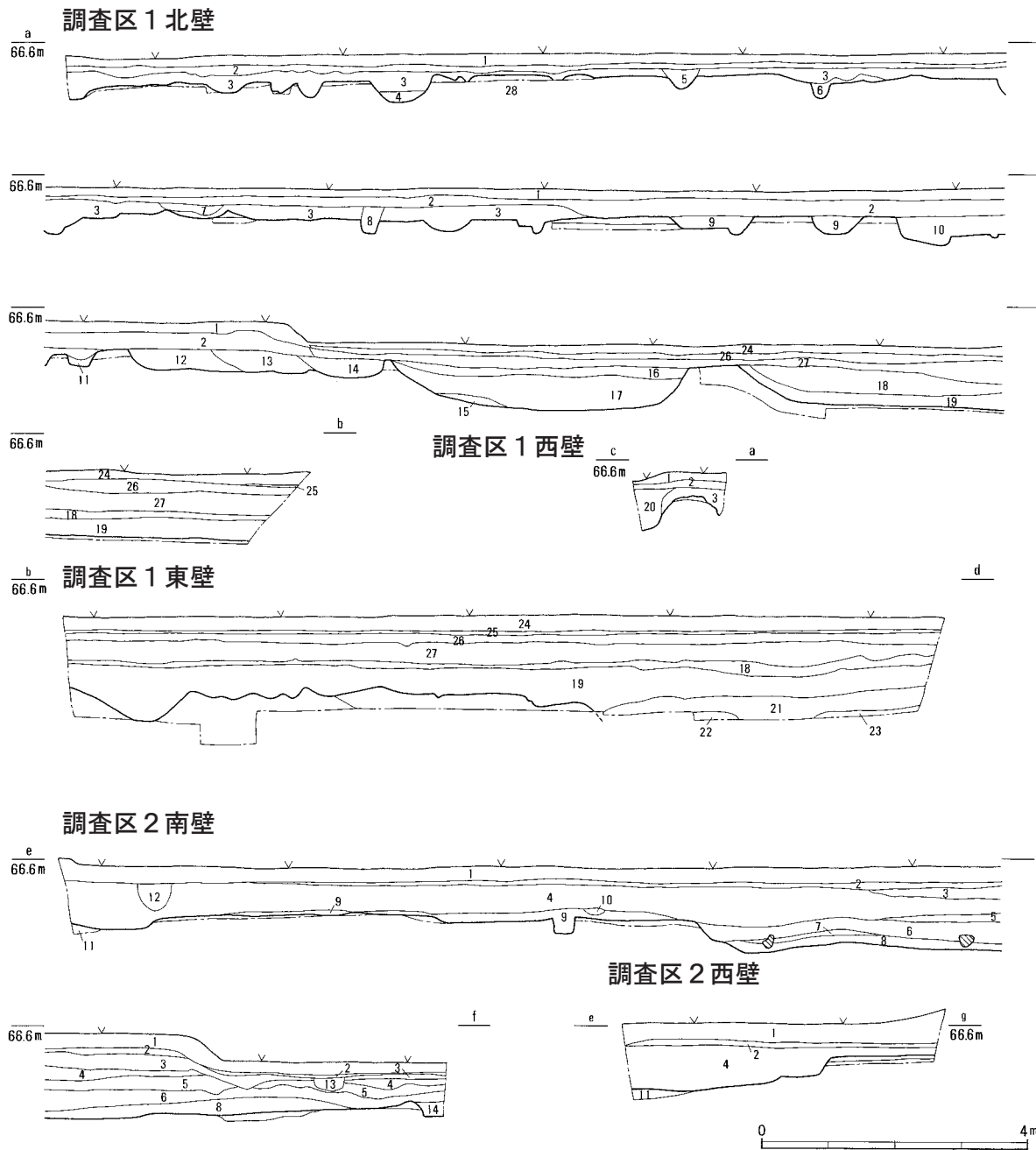
17基を検出したが、形状は多様であり、性格が不明のものがほとんどである。小穴状の遺構S K 313・314を鎌倉時代、他を室町時代に属するものと考えたが、S K 315・316・320は遺物からの判断は困難で、周辺の遺構状況からの推測による。しかし、山茶碗が混入する遺構が大半で、S K 313・314の他に鎌倉時代に遡るものがある可能性もある。また、近世陶器が1片のみ出土するS K 304・308については混入



第4図 調査区2平面図 (1 : 200)



第5図 調査区1平面図 (1 : 200)



調査区 1

- 1 暗灰黄色砂質土 (2.5Y4/2) (耕作土)
- 2 褐色砂質土 (10YR4/4) (床土)
- 3 黒色粘土 (10YR2/1) (包含層)
- 4 黒褐色砂質土 (10YR3/4) (遺構埋土)
- 5 褐色粘土 (10YR4/4) (遺構埋土)
- 6 黒色砂質土 (10YR2/1) (遺構埋土)
- 7 褐色砂礫 (10YR4/4)
- 8 暗褐色粘土 (10YR3/4) (遺構埋土)
- 9 黒褐色粘土 (10YR3/4) (遺構埋土)
- 10 黒褐色粘土 (10YR2/3) (遺構埋土)
- 11 褐色砂質土 (10YR4/4) (遺構埋土)
- 12 暗褐色粘土 (10YR3/4) (SD328埋土)
- 13 褐灰色砂質土 (10YR4/1) (SD328埋土)
- 14 暗オリーブ褐色粘土 (2.5YR3/3) (遺構埋土)

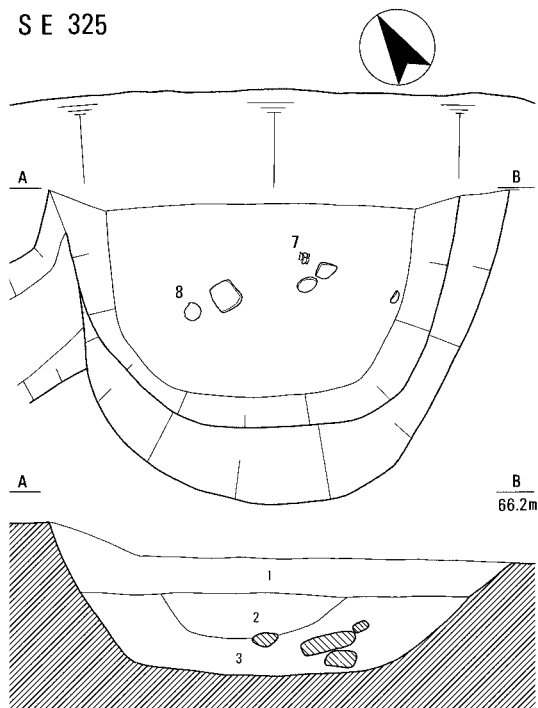
- 15 明黄褐色粘土 (10YR6/8) (SK322埋土)
- 16 暗オリーブ褐色粘土 (2.5Y3/3) (SK322埋土)
- 17 黒褐色粘土 (10YR2/3) (SK322埋土)
- 18 暗褐色砂質土 (10YR3/4) (SZ331埋土)
- 19 褐色砂質土 (10YR4/4) (SZ331埋土)
- 20 黄褐色粘土 (10YR5/6) (攪乱)
- 21 黒褐色粘土 (10YR2/3) (SZ331埋土)
- 22 暗褐色砂質土 (10YR3/3) (SZ331埋土)
- 23 黒色粘土 (10YR2/1) (SZ331埋土)
- 24 暗灰黄色砂質土 (2.5YR4/2) (耕作土)
- 25 オリーブ褐色粘土 (2.5Y4/3) (床土)
- 26 暗オリーブ褐色粘土 (2.5Y3/3) (包含層)
- 27 暗オリーブ褐色砂質土 (2.5Y3/3) (包含層)
- 28 褐色粘土 (10YR4/6) (地山)

調査区 2

- 1 オリーブ褐色土 (2.5Y4/4) (耕作土)
- 2 オリーブ褐色土 (2.5Y4/6) (床土)
- 3 オリーブ褐色土 (2.5Y4/3)
- 4 暗灰黄色土 (砂混入) (2.5Y2/4) (包含層)
- 5 黒褐色土 (砂混入) (2.5Y1/3) (包含層)
- 6 黒色土 (2.5Y1/2) (SK316・SD317埋土)
- 7 黒褐色粗砂 (2.5Y1/3) (SK316・SD317埋土)
- 8 黒色土 (2.5Y1/3) (SK316・SD317埋土)
- 9 暗灰黄色土 (2.5Y2/4) に褐色粘土 (10YR6/4) が混入 (SK306埋土)
- 10 黄褐色土 (10YR8/5)
- 11 にぶい黄色粘土 (2.5Y4/6) (地山)
- 12 暗灰黄色土 (2.5Y2/4) (攪乱)
- 13 黄灰色土 (2.5Y1/5) (攪乱)
- 14 灰黄褐色土 (10YR4/2) (SK318埋土)

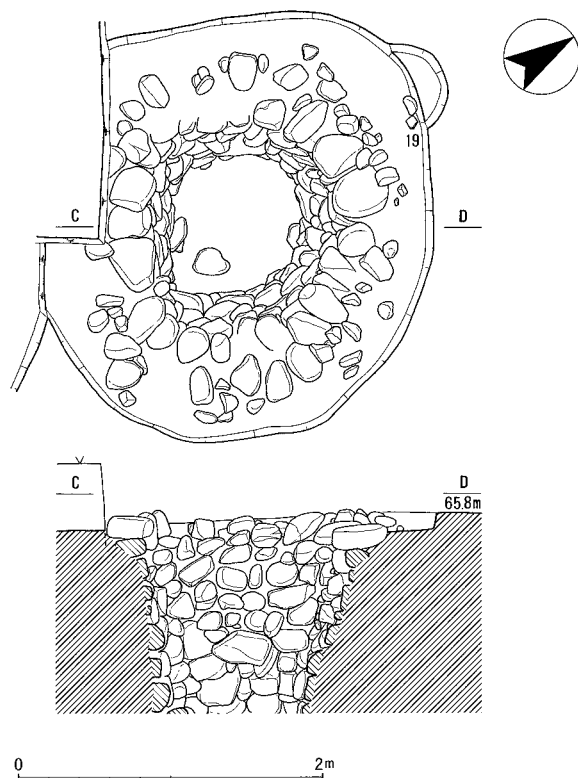
第 6 図 調査区土層断面図 (1 : 100)

S E 325



- 1 暗褐色砂質土 (10YR3/3)
- 2 褐灰色粘土質土 (砂質土混入) (10YR4/1)
- 3 褐灰色粘土質 (植物遺体多含) (10YR5/1)

S E 327



0 2m

として扱ったが、近世に下る可能性もあり、両土坑以外にも近世に下るものが幾つか存在するかもしれない。

SK301 調査区2の西端で確認した。南北に3mを確認したが南端は調査区外、西側も大半が調査区外のため規模は不明である。溝の可能性もあるが、一応、土坑として報告する。出土した遺物としては陶器甕、土師器皿、山茶碗などである。

SK303 調査区2の北西部にありSE325と重複する土坑である。調査区端の検出のため全体の規模・形状は不明であるが、調査区端を溝状に5m延び、深さは検出面から5cm程度の浅いものである。埋土には5~10cmの大小様々な石が密集しており、この集石はSE325を覆う。このことからSK303はSE325より後出のものであることが分かる。石は敷いた様子はなく雑然と集積する状態で、機能は不明とせざるを得ず、出土遺物も比較的少ない。

SK304 調査区2の西部にありSE325、SK301と重複し、SD302に隣接している。SK301に先行するが、SE325、SD302との前後関係は不明である。北側は検出面からの深さ25cmを測るが、南方へ向かって深さを減じ、南端は不明確である。したがって、平面形は不明で、土坑北壁に沿って深さ10cm程度の溝が巡ることを確認したのみである。出土した遺物としては羽釜、山茶碗、陶器鉢などであるがいずれも小片で山茶碗には墨書が施されている。

SK306 調査区2のほぼ中央部にあり、一辺約2mの方形を呈するが南端は調査区外である。検出面からの深さは10cm足らずの浅いもので底部は平坦である。底部で5基小穴を確認したが、この土坑に伴うものかは不明である。出土した遺物は比較的

SD 321



- 1 褐灰色土 (炭多含) (10YR4/1)
- 2 黒褐色土 (2~3mmの砂混入) (10YR3/1)
- 3 2に4がブロック状に混じる
- 4 にぶい黄褐色粘土質土 (地山) (10YR5/4)

第7図 SE325・327実測図、SD321土層図 (1:50)

多く、土師器皿・鍋・羽釜、山茶碗があるが全て小片である。鎌倉時代と室町時代のものが混在するが、室町時代の土坑と推測しておく。

SK307 調査区2のほぼ中央部北端で検出した。大半が調査区外のため形状は不明である。掘削を進めるにあたり、SK312とともにSD310と一体のものとなった。深さは検出から15~20cmでSD310との差は認められない。したがって、SD310の埋土の異差を誤認したものと考えるのが妥当なところである。しかし、SD310からは炭が出土したのみであるが、SK307からは土師器の皿・鍋が出土しているため前述した判断は保留しておく。

SK308 調査区2のほぼ中央部で検出した不定形な土坑で、遺構とするに疑問の残るものである。深さも一様でなく、北側が一段深く検出面から20cmを測る。出土した遺物としては土師器の皿・鍋、山茶碗、須恵器の蓋、炭とサヌカイト剥片があり多様である。鎌倉時代のものの混入が多く、近世陶器も1片出土している。時期決定が困難であるが土師器皿の特徴から室町時代に属するものとしておく。

SK311 調査区2のやや東部にあり長径40cmの小穴である。深さは検出面から20cm程度で、底には20cm程度の平坦な石が据えられていた。他に建物としてまとまる小穴は存在しないが、この石が柱の沈下を防ぐ根石であった可能性は否定できない。出土した遺物は土師器皿・鍋、山茶碗があるが、いずれも小片である。

SK312 調査区2のほぼ中央部で検出したが、掘削を進めるとSK307とともにSD310と一体のものとなった。深さは検出から15~20cmでSD310との差は認められない。したがって、SD310の埋土の異差を誤認したものと考えるのが妥当なところである。土師器の皿、山茶碗が出土しているが、いずれも小片である。

SK319 (第8図) 調査区1の中央部近くにある一辺約2.5mの不整形を呈する土坑であるが、北端部は調査区外へ溝状に延び、別遺構が重複している可能性がある。底部は平坦で、土坑中央部に10~20cmの集石があるが、組まれた様子は認められない。出土した遺物としては、土師器皿・羽釜、山茶碗、陶器甕、軽石があるが、軽石を除き1/2以下の

残存である。軽石は、表面の一部が水平に磨かれ穿孔も施されているため、明らかに人の手が加えられたものである。

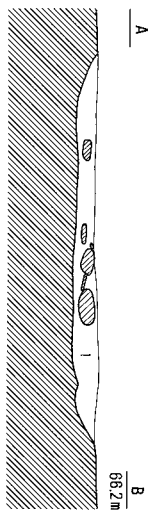
SK322 (第8図) 調査区1の東部にある土坑で、東側には谷状の落ち込みSZ331が迫る。直径4.5mの楕円形を呈する大型のものと推測されるが、北側が調査区外のため確証を欠く。灰褐色土(1)を20cmほど掘り進むと、埋土は大きく二つに分けられる。北側の褐灰色土南端に沿って30~50cmの石が土坑を仕切るように並べられていた。石は積み上げられた様子が確認でき、石の間には小型の石を配して安定を図っていたものと考えられる。石積は3段以上であったものと考えられ、この土坑を完全に区切っていたものと推測される。裏込めと思われる土層(6)も確認できることから、石積から北側が土坑として完結していたものと思われる。その場合、南半分は別遺構の重複とすることになるが、底部や平面形の様子は一連のものの可能性を示しており、判断に迷うところである。土師器皿・鍋・羽釜、山茶碗、瓦質土器の火舎、青磁、白磁、陶器播鉢等多様な遺物が出土しているが、いずれも小片である。近世陶器片が1片混入しているものの室町時代に属するものと考えられる。

SK324 SE327の西側に隣接し、SD321と重複する土坑で、埋土の関係からはSD321より後出のものと考えられる。検出の時点では一辺約2mの不整形を確認したが、掘削の結果、多数の土坑に分かれる形状を呈する。出土した遺物は土師器皿・鍋、羽釜があり、山茶碗、須恵器杯・甕等の混入も多い。

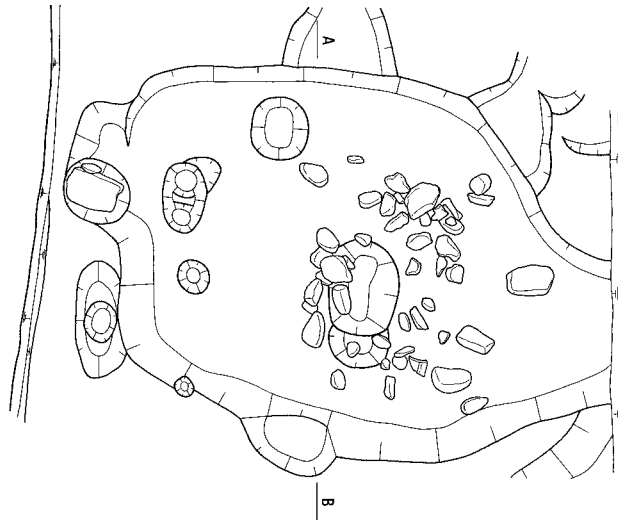
(3) 溝

7条を検出したが、形状は多様であり性格の不明なものほとんどである。時期は根拠に乏しいものもあるが室町時代に属するものと思われる。唯一奈良時代としたSD317についても須恵器杯1片のみの出土であり、混入と考え室町時代としておくほうが妥当かもしれない。

SD302 調査区2の西端で検出した。検出時はSE325の南側から弧状に弯曲して調査区外南方へ続くものとした。掘削の結果、SK304との識別が困難になり、結局その大半をSK304とし、SE325の

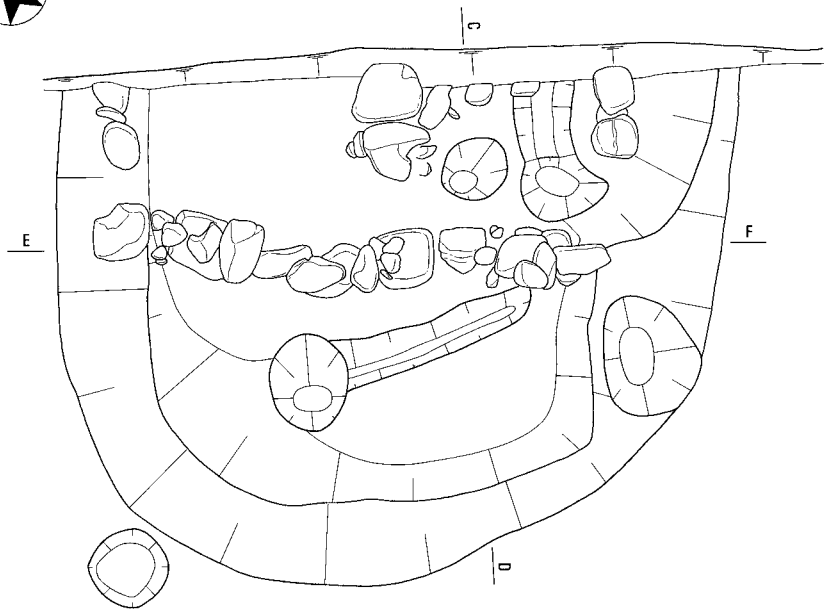
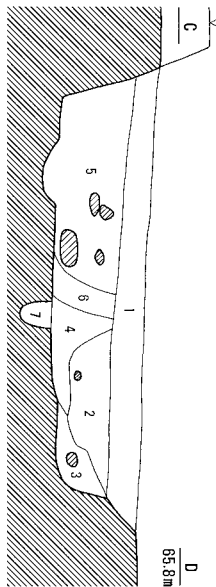


1 灰黄褐色土 (10YR5/2)

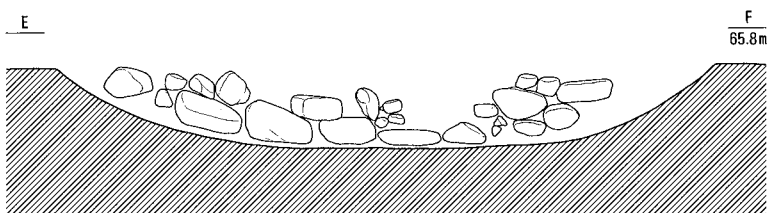
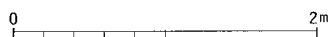


SK 319

SK 322



- 1 灰褐色土 (2~3mmの石英粒混入) (10YR4/2)
- 2 褐灰色土 (10YR4/1)
- 3 2にふい黄褐色土 (10YR5/4) が少しブロック状に混入
- 4 2にふい黄褐色粘土 (10YR5/4) がブロック状に混入
- 5 褐灰色土 (10YR4/1)
- 6 にふい黄褐色土 (10YR5/4)
- 7 黒褐色土 (10YR3/2)



第8図 SK 319・322実測図 (1:50)

南側に沿うように1.5mほど延びる幅20cm足らずの小溝となった。S E 325との関連は不明であるが、山茶碗や灰釉陶器の混入はあるものの室町時代の遺構と考えられ、S E 325と同時期である。

SD 3 1 0 調査区2の中央部にあり、検出時には調査区を横断する溝と認識した。しかし掘削の結果、重複するS K 307・312と同化し、直径約3mの円形状を呈する。深さは検出面から20cm程度で炭の他に出土遺物はない。しかし、S K 307・312と同遺構とするならば室町時代のものとなる。

SD 3 1 7 S K 316と重複して検出したがS K 316との識別は明確ではない。しかし底部はS K 316より一段深く、検出面から20cm、長辺1.6mの長円形の土坑状を呈する。出土した遺物は須恵器杯のみで、これによると溝の時期は奈良時代と推測されるが混入遺物とも考えられる。

SD 3 2 1 (第7図) 調査区1の中央部で検出した幅約80cmの溝である。調査区外から3mほど南に向かい、直角にちかい角度で屈曲し、東へ4mでS K 324に至る。その先にはS E 327があり、S K 324を介してS E 327と連絡していた可能性もある。その場合、S E 327の排水機能をもつものと推測でき、直角ちかく屈曲する様子から何かを避けながら排水していたものと推測できる。埋土に砂の混入があるのもこれを裏付けるものかもしれない。埋土最上層には炭塊を多く含むが、この意味は不明である。遺物としては土師器皿・鍋・羽釜、青磁碗、常滑壺がありS E 327と同時期とするに矛盾はない。

SD 3 2 9 調査区1東端の谷状遺構S Z 331底部で検出した幅1.4mで弧状に巡る溝である。深さは40cm程度の比較的深いもので、土師器皿、陶器鉢等が出土しているが、いずれも小片である。

(4) 谷状遺構 (S Z 3 3 1)

調査区1の東端で東に向かう緩やかな落ち込みである。この遺構には2種類の埋土が存在し、北側から中央部へ1mは粘土質で、出土した遺物としては須恵器蓋・杯・甕、灰釉陶器である。残りの部分は砂質で、出土した遺物としては土師器鍋、陶器播鉢、山茶碗である。掘削時の認識が不十分であったため明確なことは不明であるが、S Z 331の北半には奈良あるいは平安時代に遡る遺構が存在した可能性があ

る。

さて、この谷状遺構であるが、第2次調査でも「落ち込み」として報告されており^①、西に向かって緩やかに傾斜している。今回検出したS Z 331はこの落ち込みの西端を示すものと考えられ、谷状地形の幅は約50mとなる。

〔註〕

- ① 三重県芸濃町教育委員会『北奥遺跡発掘調査報告』
2003.3

IV. 遺物

土師器皿・鍋・羽釜、山茶椀、須恵器蓋・杯、陶器播鉢・甕、瓦質土器、木製椀等が出土し、他に縄文土器や弥生前期の甕片が各1片出土している。しかし大半が小片で、一括資料としてまとめたものはない。遺構から出土したものについては室町時代に属することになり、陶器播鉢では信楽産が目立つ状況である。

(1) SD317出土遺物 (第9図)

須恵器杯(1)のみが出土した。焼成不良で、底部外面はヘラ切り痕をナデ消している。奈良時代と推測されるが、混入遺物の可能性が高い。

(2) SE325出土遺物 (第9図)

土師器皿(2・3)・羽釜(4)、山茶椀(5)、木製鉢(6)・椀(7・8)があるが、5は混入遺物となる。土師器皿は両者とも内面に稜をもつ。6・7は図上で接合したもので、口径・器高ともに不確定な要素がある。6は内外面にロクロ目を残し、漆の塗布は明確ではない。7は黒漆が塗布され、内面に赤漆による図柄が描かれる。8も7と同様であるが、赤漆による図柄は見込の他に不鮮明ながら外面にも認められる。

(3) SE327出土遺物 (第9図)

比較的多くの遺物が出土し、土師器皿(9~11)・鍋(12)・鉢(13)・羽釜(14・15)、須恵器杯(16)・壺(17・18)、山茶椀(19・20)、陶器播鉢(21)・鉢(22)があるが、須恵器・山茶椀は明らかに混入遺物、9についても混入の可能性が高い。

14は頸部に外から内へ穿孔されており、15についても同様に穿孔されている可能性がある。山茶椀は両者とも比較的高い高台を貼り付けるものである。

13は土師器であるが、土師器としては高温で焼成された様相を示す。鉢状の形態を呈するが器形は不明である。形態のみを考えれば伊勢寺遺跡北浦地区出土の土師器甕^①45に似る。しかし、ハケメによる調整はなく、外面に3又状工具による沈線を巡らす。沈線は回転台あるいはロクロにより施されるが、1周以上の回転があり、重複部分の様子では板状工具であるかの様相も見られる。いずれにしても施文と

しての意識よりは調整の一環として行われたものと思われ、施文としては二次的効果としたい。埋土上層からの出土であるため混入も考えられ、時期は不明としておく。

(4) SK301出土遺物 (第9図)

山皿(23)、山茶椀(24)、陶器の甕(25)・鉢(26)を図示したが、23・24は混入である。26の内面には工具痕が確認できるが播目はなく、捏鉢と考えられる。

(5) SK304出土遺物 (第9図)

土師器羽釜(27)、山茶椀(28・29)、陶器鉢(30)がある。27は鏝直上を棒状工具により外から内へ穿孔している。29の底部外面には墨書があり家紋のようにみえるが、記号であることは相違ないと思われる。30は内外面に灰釉が施され、近世に下るので、28・29とともに混入遺物である。

(6) SK306出土遺物 (第9図)

土師器皿(31・32)・鍋(33~37)・羽釜(38)、山茶椀(39・40)があるが、40は混入と考えられ、33・34もその可能性がある。土師器皿は内湾する口縁部をもつ南勢方面で出土例の多いものである。

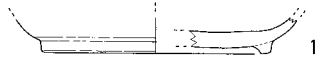
(7) SK319出土遺物 (第10図)

土師器皿(41・42)・羽釜(43・44)、山茶椀(45)、陶器甕(46)・播鉢(47)、軽石等が出土した。41は内面の稜が確認でき、42とは形態が異なる。47は固く焼締まっており、近世にちかい様相である。軽石(P31写真)は8cm×5cm程度の塊で、半裁されたかのような形状である。直径8mm程度の穿孔が5cmの厚さを貫通しており、これに紐を通せば半裁面を使用面とした場合の持ち手となる。しかし半裁面の使用痕は顕著でなく、穿孔横に小さな使用面がある。穿孔は半裁面にも痕跡があるが、こちらは貫通しておらず失敗したものと推測される。

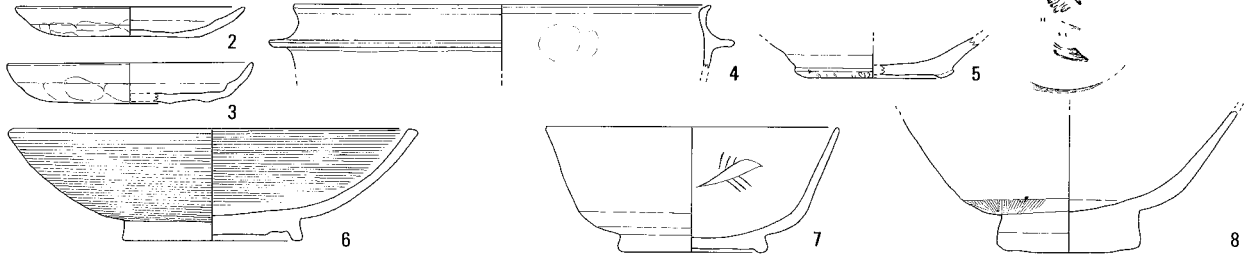
(8) SK308出土遺物 (第10図)

土師器皿(48)・鍋(49)があり、他に山茶椀(50)、須恵器蓋(51)、サヌカイト片や近世陶器も混入している。土師器皿は内湾する口縁部をもつ南勢方面で出土例の多いものである。

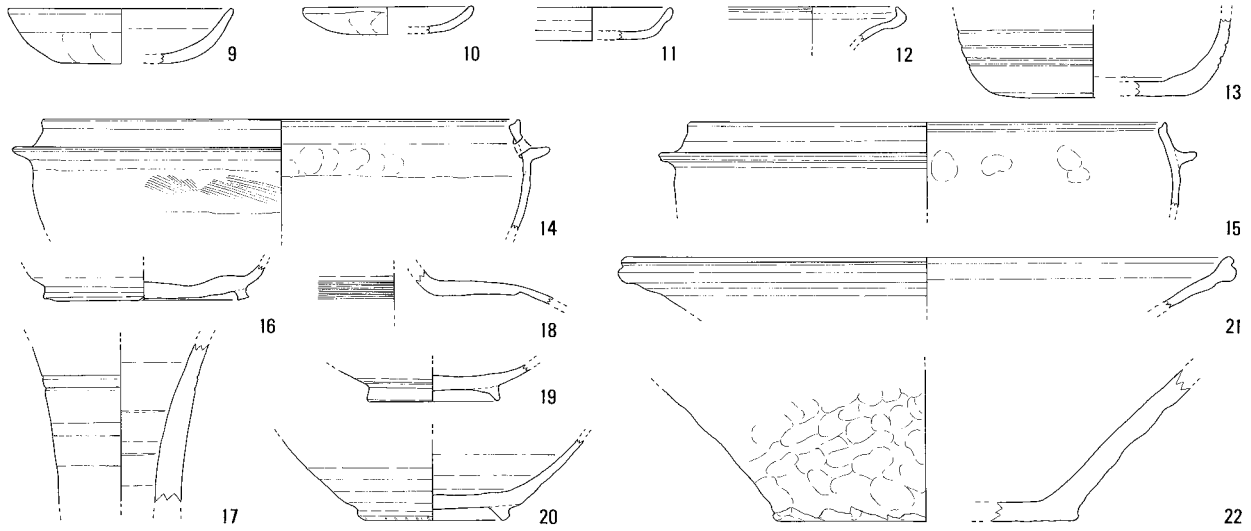
SD 317



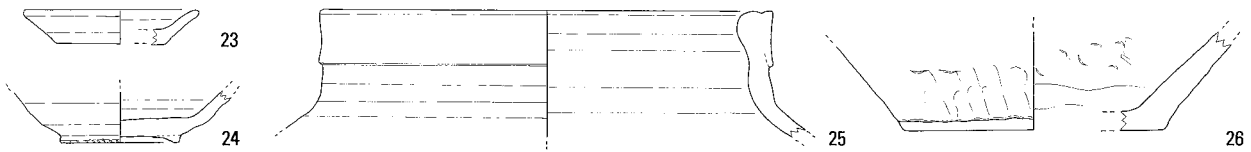
SE 325



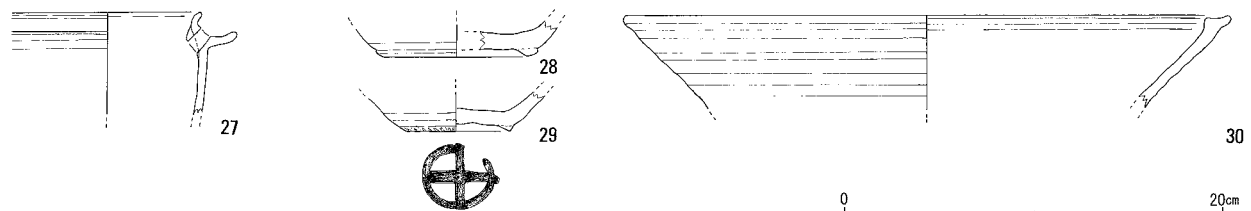
SE 327



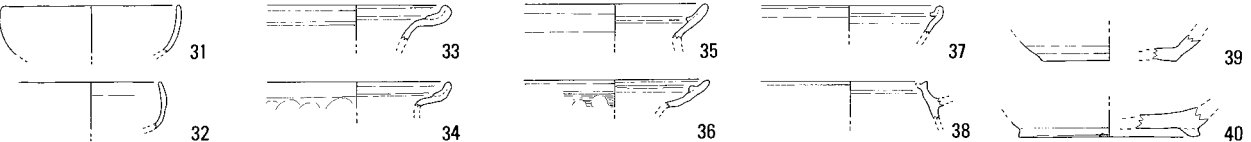
SK 301



SK 304

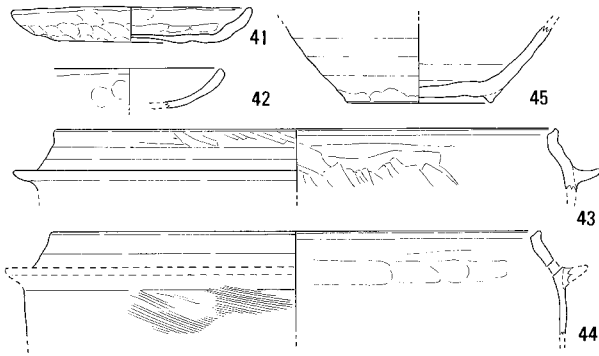


SK 306

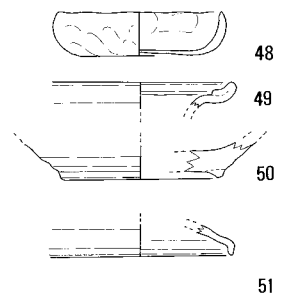


第9図 SD317、SE325・327、SK301・304・306出土遺物実測図(1:4)

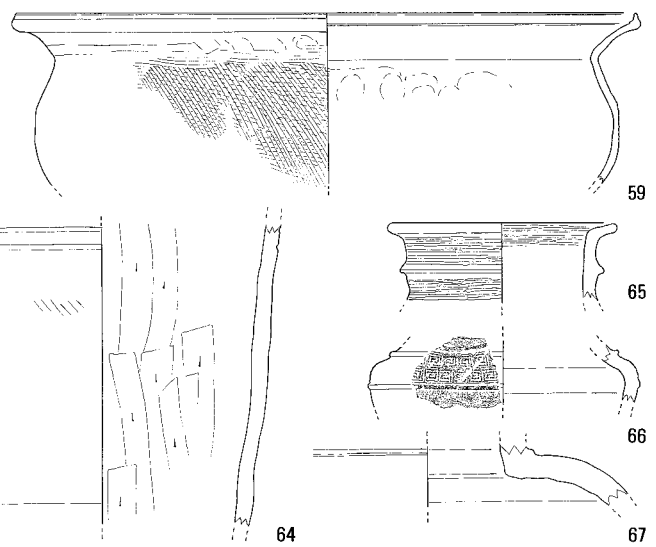
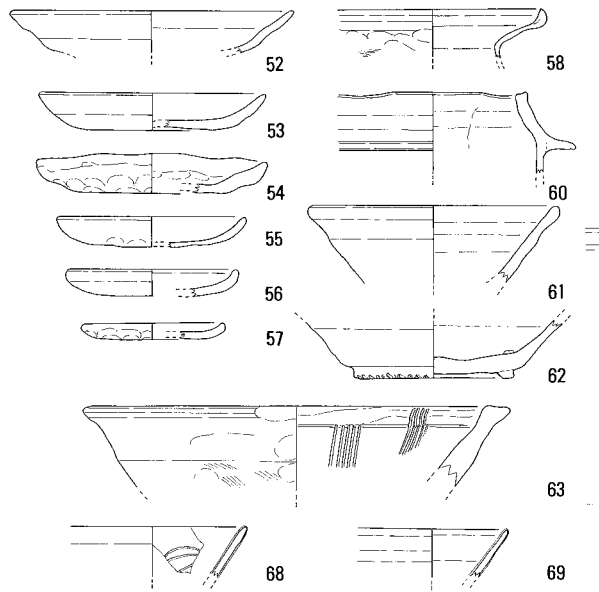
SK 319



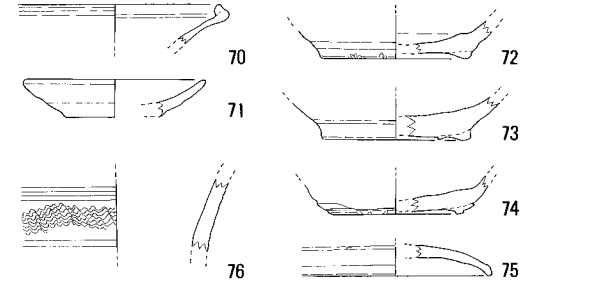
SK 308



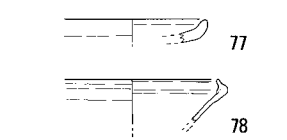
SK 322



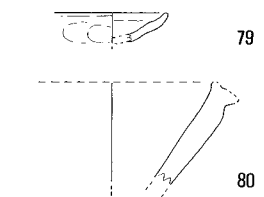
SK 324



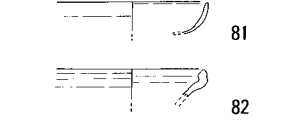
SK 307



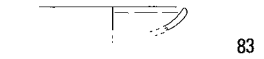
SK 303



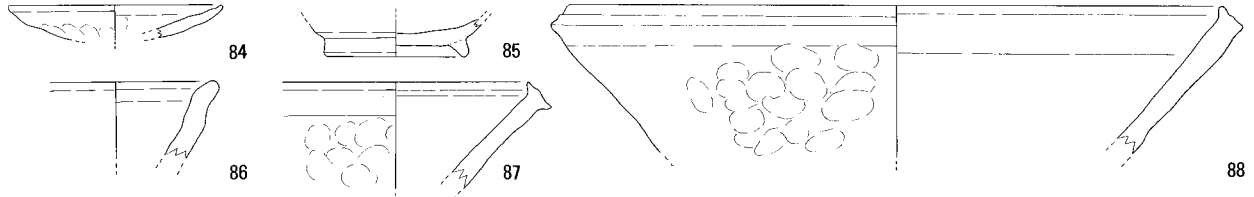
SK 311



SK 312

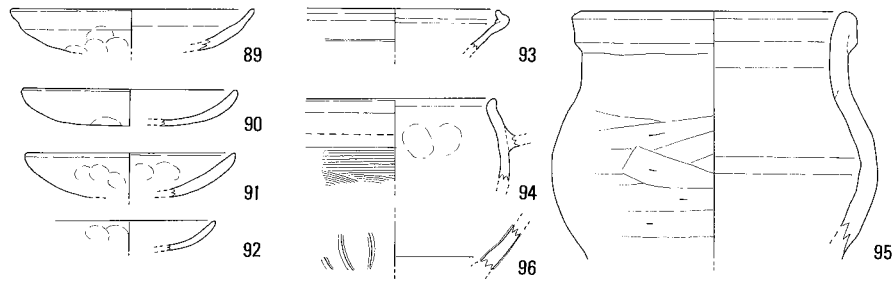


SD 329

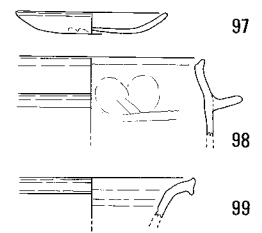


第10図 SK303・307・308・311・312・319・322・324、SD329出土遺物実測図(1:4)

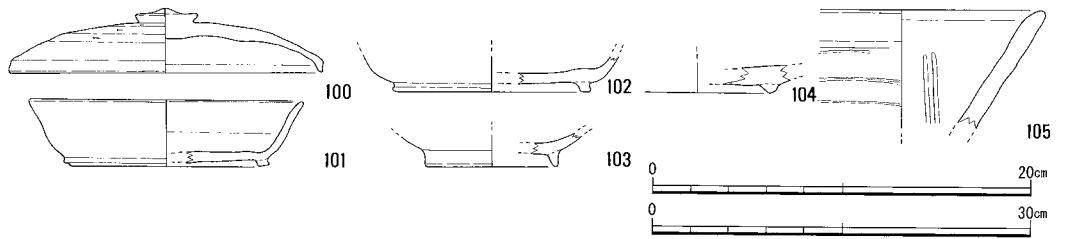
SD 321



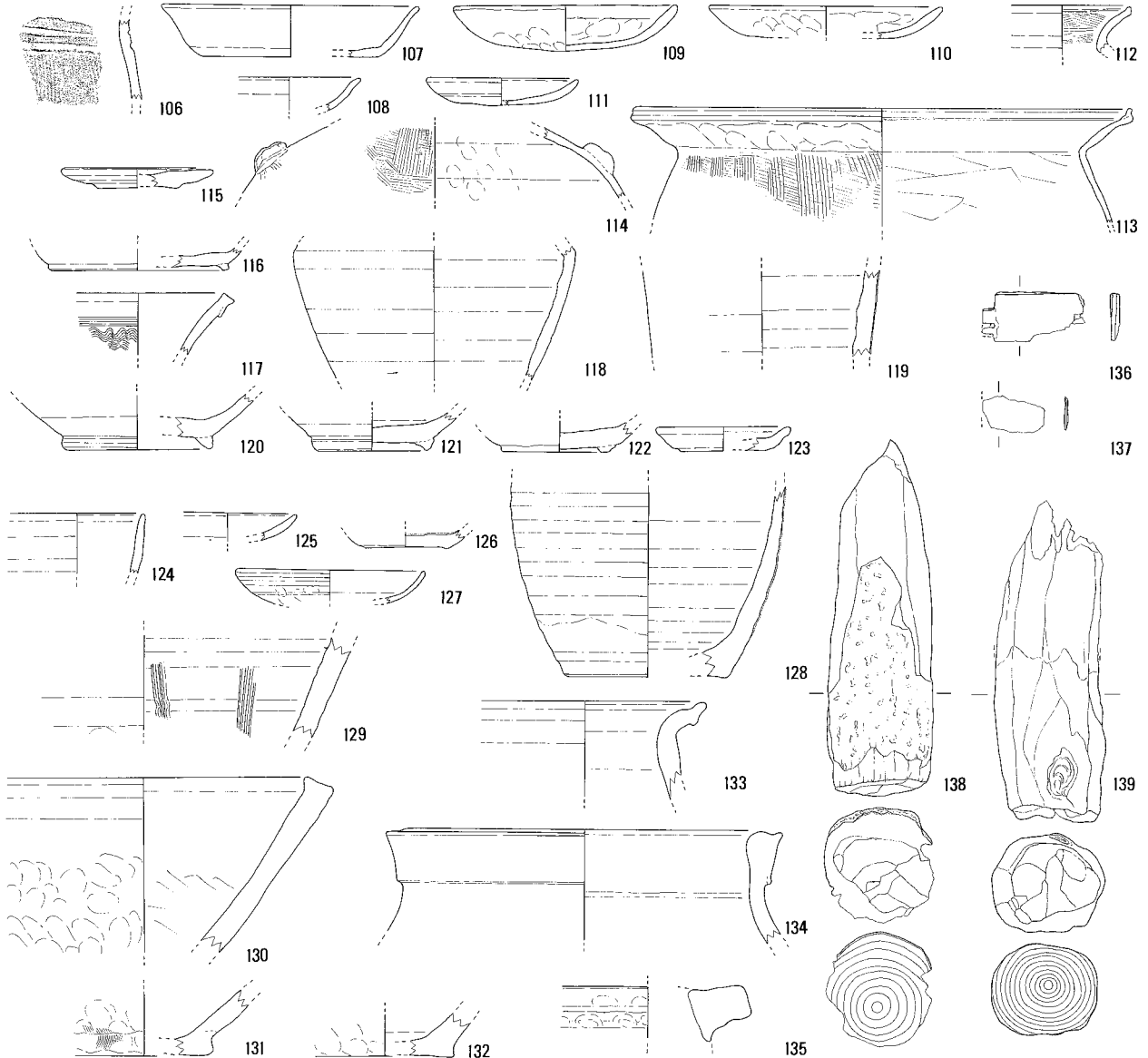
SD 302



SZ 331



包含層



第11圖 SD 302・321、SZ 331、包含層出土遺物実測圖 (89~137=1:4、138・139=1:6)

(9) SK 3 2 2 出土遺物 (第10図)

比較的多くの遺物が出土した。土師器皿 (52~57)・鍋 (58・59)・羽釜 (60)、山茶椀 (61・62)、陶器播鉢 (63)、須恵器播鉢 (64)、瓦質土器 (65~67)、青磁椀 (68)、白磁椀 (69) があるが、山茶椀は混入である。他に縄文土器の小片も 1 片出土している。

64は、内面をロクロを使用せずにヘラケズリ、外面にロクロを使用した 2 条の沈線を施す。器形は播鉢としておく。65は瓦質で、外面に丁寧なヘラミガキを施し、ヘラミガキは口縁部内面にも及ぶ。壺状器形の口縁部で66と同一個体の可能性を残す。茶瓶としたが托の可能性も残る。66・67については火舎とした。両者とも削り出し突帯を施し、67は風炉と呼ばれる器形を呈するものと思われる。66は火舎としては小型であるが、火舎によくみられるスタンプによる雷文を肩部に 2 段に施している。前述したように65と同一個体であるならば茶瓶等の壺状の器形を呈する可能性もある。

(10) SK 3 2 4 出土遺物 (第10図)

土師器鍋 (70)、ロクロ土師器皿 (71)、山茶椀 (72~74)、須恵器蓋 (75)・甕 (76) があるが、70 以外は混入である。73の内面は使用により平滑になっている。

(11) SK 3 0 7 出土遺物 (第10図)

土師器皿 (77)・鍋 (78) があるが両者とも小片である。

(12) SK 3 0 3 出土遺物 (第10図)

出土遺物は全て小片で、土師器皿 (79)、陶器鉢 (80) を図示した。

(13) SK 3 1 1 出土遺物 (第10図)

土師器皿 (81)・鍋 (82)、山茶椀が出土しているが、いずれも小片で山茶椀は混入である。81の口縁部には煤が付着し、灯明皿として使用されたものらしい。

(14) SK 3 1 2 出土遺物 (第10図)

土師器皿、山茶椀が出土しているが、全て小片である。図示したものは83のみである。

(15) SD 3 2 9 出土遺物 (第10図)

土師器皿 (84)、山茶椀 (85)、陶器鉢 (86~88) があり、山茶椀は混入である。85の内面は使用により平滑になっている。

(16) SD 3 2 1 出土遺物 (第11図)

土師器皿 (89~92)・鍋 (93)・羽釜 (94)、陶器甕 (95)、青磁椀 (96) がある。96は外面に幅の広い蓮弁文を施し、古相を呈する。

(17) SD 3 0 2 出土遺物 (第11図)

土師器皿 (97)・羽釜 (98)、灰釉陶器壺 (99)、山茶椀等が出土しているが、99は混入である。97の口縁部には煤が付着し灯明皿として使用されたものらしい。99は須恵器と迷うところであるが、灰釉陶器としておく。

(18) SZ 3 3 1 出土遺物 (第11図)

比較的多くの遺物が出土し、須恵器蓋 (100)・須恵器杯 (101・102)、灰釉陶器椀 (103)、山茶椀 (104)、陶器播鉢 (105) を図示した。103は灰釉陶器としたが山茶椀と迷う。奈良時代に属する須恵器 (100~102) は既述したように重複していたと思われるこの時期の遺構に伴うものと思われる。

(19) 包含層・その他遺構出土遺物 (第11図)

弥生土器甕 (106)、土師器杯 (107)・皿 (108~111)・甕 (112)・鍋 (113)・茶釜 (114)、ロクロ土師器皿 (115)、須恵器杯 (116)・甕 (117)・壺 (118)、灰釉陶器壺 (119)、山茶椀 (120~123)、施釉陶器椀 (124・126)・皿 (125・127)・瓶 (128)、陶器播鉢 (129)・鉢 (130~132)・甕 (133~135)、木製部材 (136・137)・柱根 (138・139) がある。106は半裁竹管による沈線を巡らし前期新段階に相当するものと思われる。128はSE327上層出土の小片と接合しており、それに伴う可能性もあるが近世に下る可能性のあるもののため、ここに図示した。136・137は指物片と思われ、両者ともヒノキ亜科で、同一個体の可能性もある。

〔註〕

- ① 三重県教育委員会『昭和63年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告—第2分冊—』1989.3

番号	実測番号	遺構	出土位置	器種 器形	法 量 (cm)			調整技法の特徴	色 調	胎土	残存度	備 考
					口径	器高	その他					
1	15-01	SD317	2-F4	須恵器 杯	—	—	高台径 12.0	ロクロナデ 底部外面：ナデ	外面：灰 (5YR6/1) 内面：灰黄 (2.5YR7/2)	1mm以下の砂粒含	底部2/12	焼成不良
2	6-03	SE325	2-B3	土師器 皿	12.0	1.6	—	内面：ナデ・オサエ 底部外面：オサエ	内外面：褐灰 (7.5YR5/1.4/1)	微砂粒含	口縁部6/12	歪みが激しい
3	6-04	SE325	2-B3	土師器 皿	13.0	2.1	—	オサエ	外面： にぶい黄橙 (10YR7/2)～褐灰 (10YR4/1) 内面：褐灰 (10YR4/1)～灰黄褐 (10YR6/2)	2mmの砂粒含	口縁部5/12	歪みが激しい
4	6-05	SE325 2層	2-B3	土師器 羽釜	22.0	—	—	ナデ・オサエ	内外面：灰黄褐 (10YR6/2)	2mmの砂粒含	口縁部1/12	内外面に煤付着
5	5-04	SE325 3層	2-B3	山茶碗	—	—	底径 8.4	ロクロナデ 底部外面：糸切痕	内外面：灰白 (2.5YR7/1)	微砂粒含	底部5/12	高台に粉痕
6	4-02	SE325	2-B3	木製品 鉢	21.6	5.9	高台径 9.5	ロクロ引き、漆は塗られてい ない	—	カバノキ属	底部4/12	内面：ロクロ引き目5～6条 (1cm) 外面：ロクロ引き目6～7条 (1cm)
7	4-01	SE325 木2	2-B3	木製品 碗	15.4	6.6	高台径 7.8	ロクロ引き、黒漆塗、	—	ブナ属	底部5/12 口縁小片	赤漆施文があるが不鮮明
8	1-01	SE325 木1	2-B3	木製品 碗	—	—	高台径 7.5	黒漆塗、内面一部に赤漆塗	—	ブナ属	底部完存	
9	9-06	SE327	1-L2	土師器 皿	12.0	2.9	—	外面：ナデ、オサエ 内面：ナデ	内外面：浅黄橙 (7.5YR8/4)	密	口縁部1/12	
10	9-04	SE327 1層	1-L2	土師器 皿	9.0	1.4	—	外面：ナデ、オサエ 内面：ナデ	内外面：灰白 (10YR8/2)	密	口縁部2/12	
11	9-05	SE327 1層	1-L2	土師器 皿	—	1.7	—	ナデ	内外面：にぶい橙 (7.5YR7/4)	密	小片	
12	8-06	SE327	1-L2	土師器 鉢	—	—	—	ナデ	内外面：浅黄橙 (7.5YR8/4)	密	小片	
13	9-01	SE327 1層	1-L2	ロクロ土師器	—	—	底径 11.0	ロクロナデ	外面：にぶい橙 (7.5YR7/4) 内面：にぶい橙 (7.5YR6/4)	3mmの砂粒含	底部3/12	外面に沈線4条あるが、調整痕か。外 面に煤付着。器形不明
14	9-02	SE327 1層	1-L2	土師器 羽釜	25.0	—	鈔径 28.3	外面：ハケメ 内面：ナデ、オサエ	外面：にぶい橙 (7.5YR6/4)、 褐灰 (7.5YR5/1) 内面：にぶい褐 (7.5YR5/3)	2mmの砂粒含	口縁部2/12	頸部に外から内へ穿孔あり
15	8-03	SE327	1-L2	土師器 羽釜	25.2	—	鈔径 28.3	ナデ、オサエ	外面：橙 (5YR6/6) 内面：にぶい褐 (7.5YR6/3)	微砂粒含	口縁部5/12	外面に煤付着
16	6-01	SE327 1層	1-L2	須恵器 杯	—	—	底径 10.8	ロクロナデ 底部外面：ヘラ切痕	内外面：灰白 (5YR7/1)	密	底部8/12	
17	5-05	SE327 No.3	1-L2	須恵器 長頸壺	—	—	—	ロクロナデ	内外面：灰白 (2.5YR7/1)	3mmの砂粒含	体部3/12	外面に沈線2条、外面に自然釉
18	9-03	SE327	1-L2	須恵器 壺	—	—	—	外面：カキメ 内面：アテ具痕	内外面：灰白 (N7/0)	2mmの砂粒含	小片	
19	5-03	SE327 No.1	1-L2	山茶碗	—	—	高台径 7.0	ロクロナデ 底部外面：糸切痕	内外面：灰白 (2.5YR7/1)	密	底部完存	
20	6-02	SE327 1層	1-L2	山茶碗	—	—	底径 8.0	ロクロナデ 底部外面：ナデ	内外面：灰白 (10YR7/1)	密	底部5/12	高台に粉痕、内外面に自然釉、内面 に使用による摩滅
21	5-02	SE327 1層	1-L2	陶器 播鉢	32.6	—	—	ヨコナデ	内外面：暗赤灰 (7.5YR4/1)	密	口縁部1.5/12	
22	5-01	SE327	1-L2	陶器 鉢	—	—	底径 16.0	ナデ・オサエ	外面：橙 (5YR6/6) 内面：浅黄橙 (7.5YR8/3)	5mmの砂粒小石含	底部4/12	内面の劣化が激しい、体部外面下端に ヘラ等によるオサエあり
23	7-07	SK301	2-B3	山茶碗 皿	9.3	1.8	—	ロクロナデ 底部外面：糸切痕	内外面：灰白 (2.5YR7/1)	3mmの砂粒含	口縁部2/12	
24	8-02	SK301	2-B4	山茶碗	—	—	高台径 6.3	ロクロナデ 底部外面：糸切痕	内外面：灰白 (2.5YR7/1)	2mmの砂粒含	底部5/12	高台に粉痕
25	8-04	SK301	2-B3	陶器 甕	24.0	—	—	ロクロナデ	外面： にぶい褐 (7.5YR5/3)～にぶい赤褐 (5YR5/3) 内面：にぶい褐 (7.5YR5/3)	3mmの砂粒含	口縁部1/12	
26	7-05	SK301	2-B4	陶器 鉢	—	—	底径 14.2	ナデ、オサエ	外面：にぶい赤褐 (2.5YR5/3) 内面：にぶい赤褐 (5YR5/4)	微砂粒含	底部2/12	底部外面に砂痕
27	8-01	SK304	2-B3	土師器 羽釜	—	—	—	ナデ、オサエ	外面： にぶい黄橙 (10YR7/2)～にぶい褐 (7.5YR5/3) 内面：にぶい黄橙 (10YR7/2)	2mmの砂粒含	小片	頸部に外から内へ穿孔あり、鈔以下に 煤付着
28	7-03	SK304	2-B3	山茶碗	—	—	底径 8.4	ロクロナデ 底部外面：ナデ	内外面：灰白 (2.5YR8/1)	2mmの砂粒含	底部3/12	底部外面に砂付着
29	7-02	SK304	2-B3	山茶碗	—	—	底径 5.4	ロクロナデ 底部外面：糸切り痕	内外面：灰白 (2.5YR7/1)	2mmの砂粒含	底部11/12	高台に粉痕、底部外面に墨書
30	7-01	SK304	2-B3	陶器 鉢	32.0	—	—	ロクロナデ	素地：浅黄橙 (10YR8/4) 釉色：オリープ (5YR5/4)	微砂粒含	口縁部2/12	古瀬戸
31	10-01	SK306	2-C4	土師器 皿	9.4	—	—	指オサエ、ナデ	内外面：浅黄橙 (10YR8/3)	微砂粒含	口縁部4/12	表面の風化が激しい
32	10-02	SK306	2-C4	土師器 皿	—	—	—	指オサエ、ナデ	内外面：灰白 (10YR8/2)	微砂粒含	口縁部小片	
33	10-04	SK306	2-C4	土師器 鉢	—	—	—	ヨコナデ	外面：にぶい橙 (2.5YR6/4) 内面：灰褐 (7.5YR5/2)	3mm以下の砂粒含	口縁部小片	外面に煤付着
34	10-07	SK306	2-C4	土師器 鉢	—	—	—	外面：指オサエ	内外面：灰白 (10YR8/2)	微砂粒含	口縁部小片	外面に煤厚く付着
35	10-05	SK306	2-C4	土師器 鉢	—	—	—	外面：指オサエ	内外面：灰黄褐 (10YR6/2)	1mmの砂粒含	口縁部小片	内外面に煤付着、外面は濃く付着

第1表 遺物観察表

番号	実測番号	遺構	出土位置	器種器形	法量 (cm)			調整技法の特徴	色調	胎土	残存度	備考
					口径	器高	その他					
36	10-06	SK306	2-C4	土師器鍋	—	—	—	外面：ハケメ、オサエ	内外面：浅黄橙 (10YR8/3)	1mmの砂粒含	口縁部小片	外面に煤付着
37	10-08	SK306	2-C4	土師器鍋	—	—	—	ヨコナデ	内外面：にぶい褐 (7.5YR6/3)	2mmの砂粒含	口縁部小片	外面に煤付着
38	10-03	SK306	2-C4	土師器羽釜	—	—	—	ヨコナデ	内外面：灰白 (2.5YR8/2)	2mm以下の砂粒含	口縁部小片	鏝以下に煤付着
39	10-10	SK306	2-C4	山茶椀	—	—	底径7.5	ロクロナデ 底部外面：糸切痕	内外面：灰白 (5YR7/1)	2mmの砂粒含	底部2/12	
40	10-09	SK306	2-C4	山茶椀	—	—	高台径7.5	ロクロナデ 底部外面：糸切痕	内外面：灰白 (2.5YR8/1)	1mmの砂粒含	底部2/12	高台に粉痕
41	12-01	SK319	1-H1	土師器皿	12.7	1.9	—	外面：ナデ、指オサエ 内面：オサエ	外面：灰黄 (2.5YR7/2) 内面：灰白 (10YR8/2)	1mm以下の砂粒含	口縁部6/12	底部内面に煤付着。歪みが激しい。口縁部から内面に強い指オサエ
42	12-03	SK319	1-H2	土師器皿	—	—	—	ナデ	内外面：灰白 (10YR8/2)	密	口縁部小片	
43	13-01	SK319	1-H2	土師器羽釜	25.6	—	—	内面：工具ナデ	内外面：にぶい黄橙 (10YR7/2)	3mm以下の砂粒含	口縁部1/12	内外面に煤付着
44	12-06	SK319	1-H1	土師器羽釜	26.0	—	—	外面：ハケメ 内面：ナデ	外面：灰白 (10YR8/2) 内面：灰褐 (7.5YR5/2)	1.5mm以下の砂粒含	口縁部1/12	頸部に穿孔あり、鏝以下に煤付着
45	12-04	SK319	1-H2	山茶椀	—	—	高台径7.6	ロクロナデ 底部外面：糸切り痕	内外面：灰白 (5YR7/1)	2.5mm以下の砂粒含	底部3/12	外面に乱方向の指ナデ跡
46	12-02	SK319	1-H1	陶器甕	—	—	—	ロクロナデ	内外面：にぶい橙 (5YR6/4)	5mm以下の石粒含	口縁部小片	信楽、全体に自然釉
47	12-05	SK319	1-H1	陶器播鉢	—	—	—	内面：工具ナデ	素地：灰黄 (2.5YR7/2) 釉色：にぶい褐 (7.5YR5/2)	3mm以下の砂粒含	小片	信楽、外面のロクロナデ痕が凹線状
48	11-02	SK308	2-D3	土師器皿	8.6	2.3	—	指オサエ、ナデ	内外面：灰白 (10YR8/2)	3mmの砂粒と雲母含	口縁部3/12	全体に煤付着、外面に指頭痕あり
49	11-03	SK308	2-D4	土師器鍋	—	—	—	ヨコナデ	内外面：灰白 (10YR8/2)	1.5mm以下の砂粒と金雲母含	口縁部小片	外面に煤付着
50	11-05	SK308	2-D4	山茶椀	—	—	高台径8.2	ロクロナデ、 底部外面：糸切痕	内外面：灰白 (2.5YR7/1)	微砂粒含	底部4/12	内面に使用による摩滅
51	11-04	SK308	2-D4	須恵器蓋	—	—	—	ロクロナデ	内外面：灰白 (N7/0)	1.5mm以下の砂粒含	口縁部小片	
52	17-02	SK322	1-M1	土師器皿	15.0	—	—	ナデ	内外面：灰白 (2.5YR7/1)	やや密	口縁部1/12	
53	17-03	SK322	1-M1	土師器皿	12.0	1.9	—	ナデ、オサエ	内外面：灰白 (2.5YR8/2)	1mmの砂粒含	口縁部3/12	
54	13-03	SK322	1-M1	土師器皿	12.2	1.7~2.1	—	外面：オサエ 内面：指オサエ、ナデ	内外面：灰白 (10YR8/2)	1.5mm以下の砂粒含	口縁部2/12	歪みが激しい
55	17-06	SK322	1-M2	土師器皿	10.0	1.6	—	外面：オサエ、ナデ、 内面：ナデ	内外面：浅黄橙 (10YR8/3)	1mmの砂粒含	口縁部1/12	
56	17-01	SK322	1-M2	土師器皿	9.1	1.4	—	ナデ	内外面：にぶい黄橙 (10YR7/3)	やや密	口縁部2/12	
57	13-05	SK322	1-M1	土師器皿	7.6	0.9	—	外面：オサエ 内面：ナデ	内外面：淡赤橙 (2.5YR7/4)	微砂粒含	口縁部2/12	
58	13-02	SK322	1-M2	土師器鍋	—	—	—	外面：ハケメ 内面：ナデ	内外面：浅黄橙 (7.5YR8/3)	微砂粒含	口縁部小片	外面に煤付着
59	14-06	SK322	1-M2	土師器鍋	32.8	—	—	外面：ハケメ 内面：ナデ	内外面：にぶい橙 (7.5YR7/4)	0.5mm以下の砂粒含	口縁部1/12	外面に煤が厚く付着
60	13-07	SK322	1-M1	土師器羽釜	—	—	—	外面：ハケメ 内面：ナデ	内外面：にぶい黄橙 (10YR7/3)	1.5mm以下の砂粒含	口縁部小片	外面に煤付着
61	13-06	SK322	1-M1	山茶椀	13.0	—	—	ロクロナデ	内外面：灰白 (2.5YR7/1)	5mm以下の小石粒含	口縁部3/12	自然釉が付着
62	13-04	SK322	1-M1	山茶椀	—	—	高台径8.4	ロクロナデ 底部外面：糸切痕	内外面：灰白 (10YR8/1)	5mm以下の小石粒含	底部5/12	高台に粉痕、内面に重焼痕、
63	14-01	SK322	1-M2	陶器播鉢	22.4	—	—	ロクロナデ	外面：にぶい橙 (2.5YR6/4) 内面：にぶい橙 (5YR6/3)	7mm以下の小石粒多含	口縁部1/12	信楽、内面に筋目
64	17-07	SK322	1-M2	須恵器播鉢	—	—	—	外面：ナデ、ケズリ 内面：ケズリ	外面：灰 (7.5YR5/1) 内面：灰 (7.5YR6/1)	3mmの砂粒含	小片	外面に沈線2条と工具痕
65	17-04	SK322	1-M2	瓦質土器茶瓶	12.2	—	—	外面：ミガキ 内面：ナデ	外面：暗灰 (N3/0) 内面：暗灰 (N3/0)・にぶい黄橙 (10YR6/3)	密	口縁部1/12	66と同一個体の可能性あり
66	14-03	SK322	1-M2	瓦質土器火舎	—	—	肩部14.4	外面：ミガキ 内面：ナデ	外面：暗灰 (N3/0) 内面：黄灰 (2.5YR6/1)	微砂粒含	小片	外面に削出突帯と「雷文」
67	14-02	SK322	1-M1	瓦質土器火舎	—	—	—	外面：ミガキ 内面：工具ナデ	内外面：灰 (N4/0)	~1mm以下の砂粒含	小片	外面天井部に削出突帯
68	14-04	SK322	1-M2	青磁椀	—	—	—	内外面：ロクロナデ	素地：白灰 (5YR7/1) 釉色：灰オリーブ (5YR6/2)	密	口縁部小片	内面に印刻
69	14-05	SK322	1-M2	白磁椀	—	—	—	内外面：ロクロナデ	素地：灰白 (N8/0) 釉色：灰白 (7.5YR7/1)	微砂粒含	口縁部小片	
70	16-08	SK324	1-L2	土師器鍋	—	—	—	ナデ	内外面：にぶい黄橙 (10YR6/3)	やや密	口縁部小片	外面に煤付着

第1表 遺物観察表

番号	実測番号	遺構	出土位置	器種 器形	法 量 (cm)			調整技法の特徴	色 調	胎土	残存度	備 考
					口径	器高	その他					
71	16-06	SK324	1-K2	ロクロ土師器 皿	9.6	1.9	—	ロクロナデ 底部外面：糸切り痕	内外面：橙 (7.5YR7/6)	～1mmの砂粒含	口縁部2/12	
72	15-04	SK324	1-L2	山茶椀	—	—	高台径 7.8	ロクロナデ 底部外面：糸切り痕	内外面：灰白 (2.5YR7/1)	～2mmの砂粒含	底部5/12	高台に粉殻痕、内面重ね焼き痕
73	15-02	SK324	1-L2	山茶椀	—	—	高台径 7.8	ロクロナデ 底部外面：糸切り痕	内外面：灰白 (2.5YR7/1)	密	底部3/12	高台に粉殻痕、内面使用による摩滅
74	15-03	SK324	1-K2	山茶椀	—	—	高台径 7.2	ロクロナデ 底部外面：糸切り痕	内外面：灰白 (5YR6/1)	～4mmの小石・砂粒含	底部3/12	高台に粉殻痕
75	15-08	SK324	1-K2	須恵器 蓋	—	—	—	ロクロナデ 外面：ロクロケズリ	外面：灰 (5YR5/1) 内面：灰 (5YR6/1)	～1mm以下の砂粒含	口縁部小片	焼成やや不良
76	17-05	SK324	1-K2	須恵器 甕	—	—	—	ロクロナデ	内外面：灰 (5YR6/1)	～1mmの砂粒含	小片	外面に沈線2条と波状文、還元不良
77	10-11	SK307	2-D3	土師器 皿	—	—	—	ナデ	内外面：灰白 (10YR8/2)	微砂粒含	口縁部小片	
78	11-01	SK307	2-D3	土師器 鍋	—	—	—	ヨコナデ	内外面：にぶい橙 (7.5YR7/3)	微砂粒含	口縁部小片	外面に煤厚く付着
79	7-04	SK303	2-C3	土師器 皿	—	—	—	口縁部：オサエ	内外面：浅黄橙 (10YR8/3)	密	口縁部小片	
80	7-06	SK303	2-B3	陶器 鉢	—	—	—	ナデ、オサエ	外面：灰褐 (5YR5/2) 内面：にぶい赤褐 (2.5YR5/3) 赤灰 (2.5YR4/1)	微砂粒含	口縁部小片	
81	11-06	SK311	2-E4	土師器 皿	—	—	—	口縁部：オサエ	内外面：オリーブ黒 (7.5YR3/1)	密	口縁部小片	外面に煤が厚く付着
82	11-07	SK311	2-E4	土師器 鍋	—	—	—	—	外面：灰白 (2.5YR8/2) 内面：浅黄橙 (2.5YR8/3)	～3mmの砂粒含	口縁部小片	摩滅が激しい
83	11-08	SK312	2-D3	土師器 小皿	—	—	—	口縁部：ツマミナデ	内外面：浅黄橙 (10YR8/3)	微砂粒含	口縁部小片	
84	18-05	SD329	1-N2	土師器 皿	11.3	—	—	指オサエ、ナデ	内外面：にぶい黄橙 (10YR7/4)	密	口縁部1/12	
85	18-06	SD329	1-N2	山茶椀	—	—	高台径 7.6	ロクロナデ 底部外面：糸切り痕	内外面：灰白 (N8/0)	密	底部3/12	内面使用による摩滅
86	18-07	SD329	1-N2	陶器 鉢	—	—	—	ロクロナデ	内外面：にぶい黄橙 (10YR7/2)	密	口縁部小片	
87	18-04	SD329	1-N2	陶器 鉢	—	—	—	外面：オサエ、ナデ 内面：ナデ、	外面：にぶい橙 (5YR6/3) 内面：明褐灰 (5YR7/2)	～0.5mmの砂粒含	口縁部小片	
88	19-01	SD329	1-N2	陶器 鉢	36.4	—	—	外面：指オサエ 内面：ナデ	内外面：橙 (2.5YR6/6)	やや密	口縁部1/12	
89	16-05	SD321 3層	2-J2	土師器 皿	12.8	—	—	外面：ナデ、オサエ 内面：ナデ	内外面：にぶい黄橙 (10YR7/2)	～2mmの砂粒含	口縁部2/12	
90	16-07	SD321	1-J2	土師器 皿	11.4	—	—	外面：ナデ、オサエ 内面：ナデ	内外面：橙 (7.5YR7/6)	～1mmの砂粒含	口縁部5/12	
91	18-01	SD321	1-J2	土師器 皿	11.1	—	—	オサエ、ナデ	内外面：にぶい橙 (7.5YR7/4)	密	口縁部3/12	
92	18-02	SD321	1-J2	土師器 皿	—	—	—	ナデ	内外面：にぶい橙 (7.5YR7/4)	密	口縁部小片	歪みが激しい
93	16-03	SD321 下層	1-J1	土師器 鍋	—	—	—	ナデ	外面：灰黄褐 (10YR5/2) 内面：にぶい黄橙 (10YR6/3)	～2mmの砂粒含	口縁部小片	外面に煤付着
94	16-02	SD321	1-J2	土師器 羽釜	—	—	—	外面：ハケメ 内面：オサエ、ナデ	外面：にぶい黄褐 (10YR5/3) 内面：にぶい黄橙 (10YR7/3)	～2mmの砂粒含	口縁部小片	ツバ以下に煤付着
95	18-03	SD321	1-J2	陶器 甕	15.0	—	—	外面：ナデ、ケズリ 内面：ナデ	外面：褐灰 (10YR6/1) 内面：にぶい褐 (7.5YR5/3)	～3mmの砂粒含	口縁部1/12	
96	15-07	SD321 1層	1-K2	青磁 椀	—	—	—	外面：蓮弁文 内面：ロクロナデ	素地：灰 (7.5YR6/1) 釉色：灰オリーブ (5YR6/1)	密	小片	外面に蓮弁文
97	15-05	SD302	2-B3	土師器 皿	8.0	1.1	—	外面：ナデ、オサエ 内面：ナデ	内外面：灰黄 (2.5YR7/2)	～1mmの砂粒含	口縁部1/12	口縁端部に煤付着
98	15-06	SD302	2-B4	土師器 羽釜	—	—	—	ナデ	外面：灰黄 (2.5YR7/2) 内面：浅黄 (2.5YR7/3)	～2mmの砂粒含	口縁部小片	
99	16-01	SD302	2-B3	灰軸陶器 壺	—	—	—	ロクロナデ	外面：灰 (5YR5/1) 内面：灰 (5YR6/1)	密	口縁部小片	内外面に自然軸
100	19-04	SZ331	1-N1	須恵器 蓋	16.4	3.4	—	ロクロナデ 外面：ロクロケズリ	内外面：灰白 (7/0)	～2mmの砂粒含	口縁部3/12	
101	20-01	SZ331	1-O3	須恵器 杯	14.4	3.5	高台径 10.8	ロクロナデ	内外面：灰白 (N6/0)	密	口縁部1/12 底部3/12	
102	20-02	SZ331	1-P4	須恵器 杯	—	—	高台径 10.4	ロクロナデ 底部外面：ヘラ切りナデ	内外面：灰 (5YR6/1)	～0.5mmの長石含	底部2/12	
103	20-03	SZ331	1-P4	灰軸陶器 椀	—	—	高台径 7.0	ロクロナデ	内外面：灰白 (5YR7/1)	密	底部3/12	
104	20-04	SZ331	1-P4	山茶椀	—	—	—	ロクロナデ 底部外面：糸切り痕	内外面：灰白 (N8/0)	密	底部小片	
105	19-03	SZ331	1-N2	陶器 播鉢	—	—	—	外面：工具ナデ 内面：スジメ	内外面：にぶい橙 (2.5YR6/4)	～3mmの砂粒含	口縁部小片	信楽

第1表 遺物観察表

番号	実測番号	遺構	出土位置	器種 器形	法量 (cm)			調整技法の特徴	色調	胎土	残存度	備考	
					口径	器高	その他						
106	24-03	包含層	2-E4	弥生土器 甕	—	—	—	外面：ハケメ 内面：ナデ	外面：褐灰 (10YR4/1) 内面：灰黄褐 (10YR5/2)	～2mmの長石を多 含	小片	外面に半載竹筥による沈線	
107	24-02	Pit2	2-E4	土師器 杯	15.0	3.0	底径 10.4	ナデ 底部外面：ケズリ	内外面：黄灰 (2.5YR6/1)	～2mmの長石を少 し含	口縁部1/12残 底部2/12残		
108	19-02	包含層	1-L2	土師器 皿	—	—	—	外面：ナデ	内外面：にぶい黄橙 (10YR7/3)	金雲母を少し含	口縁部小片		
109	22-03	包含層	調査区1	土師器 皿	13.0	2.7	—	オサエ、ナデ	内外面：にぶい橙 (5YR7/4)	赤色粒含・金雲母 含・微砂粒含	口縁部3/12		
110	25-03	包含層	調査区2	土師器 皿	13.6	—	—	オサエ、ナデ	内外面：にぶい橙 (7.5YR7/4)	密	口縁部4/12		
111	24-06	包含層	2-O3	土師器 皿	8.9	1.6	—	オサエ、ナデ	内外面：にぶい橙 (5YR7/4)	密 (赤い粒含)	口縁部1/12		
112	25-07	包含層	調査区2	土師器 甕	—	—	—	ハケメ(7条)	外面：にぶい橙 (7.5YR7/3) 内面：にぶい黄橙 (10YR7/2)	～0.5mm以下の砂 粒含	口縁部小片		
113	21-06	Pit2	2-D3	土師器 鍋	29.0	—	—	外面：ハケメ(10条) 内面：工具ナデ、	内外面：にぶい橙 (7.5YR7/3)	赤色粒含・微砂粒 含	口縁部2/12	煤付着、タテハケメの後、ヨコハケメ	
114	25-09	包含層	1-H2	土師器 茶釜	—	—	—	外面：ハケメ 内面：オサエ、ナデ	内外面：灰白 (10YR8/2)	密	体部1/12		
115	23-01	包含層	調査区1	ロクロ土師器 皿	8.8	1.1	底径 4.6	ロクロナデ 底部外面：糸切り痕	外面：にぶい赤褐 (5YR5/4) 内面：にぶい赤褐 (2.5YR4/4)	赤色粒含・金雲母 含・2mmの砂粒含	底部3/12	風化が激しい	
116	25-04	包含層	調査区2	須恵器 杯	—	—	高台径 10.4	ロクロナデ 底部外面：ヘラ切り痕	内外面：灰 (N6/0)	密	底部1/12		
117	24-04	包含層	2-F4	須恵器 甕	—	—	—	ロクロナデ	外面：灰 (N5/0) 内面：灰白 (7.5YR7/1)	密	口縁部小片	外面に波状文とカキメ	
118	22-05	包含層	調査区1	須恵器 長頸壺	—	—	肩部 16.3	ロクロナデ、 外面一部：ロクロケズリ	外面：灰白 (N7/0) 内面：黄褐色 (10YR6/2)	～4mm以下の砂粒 含	体部2/12		
119	25-05	包含層	調査区2	灰釉陶器 壺	—	—	頸部径 13.2	内面：ロクロナデ	素地：灰白 (5YR7/1) 釉色：灰オリーブ (5YR6/2)	密	頸部小片	外面に沈線2条	
120	22-04	包含層	調査区1	山茶碗	—	—	高台径 8.8	ロクロナデ 底部外面：糸切り痕	内外面：灰白 (10YR8/1)	～2.5mm以下の砂 粒含	底部3/12	内面使用による摩滅、自然釉あり	
121	21-02	Pit2	2-D3	山茶碗	—	—	高台径 9.0	ロクロナデ 底部外面：糸切り痕	内外面：灰白 (2.5YR7/1)	～1mm以下の砂粒 含	底部3/12	内面使用による摩滅	
122	25-02	包含層	調査区2	山茶碗	—	—	高台径 6.2	ロクロナデ 底部外面：糸切り痕	内外面：灰白 (7.5YR7/1)	～2mmの長石多 含	底部3/12		
123	23-06	耕作土	調査区1	山茶碗 皿	7.8	1.5	底径 4.9	ロクロナデ 底部外面：糸切り痕	内外面：灰白 (2.5YR8/1)	～4mm以下の砂粒 含	3/12残		
124	23-03	包含層	調査区1	施釉陶器 碗	—	—	—	ロクロナデ	素地：灰白 (2.5YR8/2) 釉色：灰黄 (2.5YR7/2)	～1mm以下の砂粒 含	口縁部小片	全体的に薄い施釉	
125	25-08	耕作土	調査区2	施釉陶器 皿	—	—	—	ロクロナデ 外面：ロクロケズリ	素地：灰白 (5YR7/1) 釉色：灰白 (5YR7/2)	密	口縁部小片		
126	25-06	包含層	調査区2	施釉陶器 碗	—	—	高台径 13.6	ロクロナデ 底部外面：ロクロケズリ	素地：灰白 (5YR8/2) 釉色：灰オリーブ (5YR5/2)	密	底部4/12	削出高台、内面に施釉	
127	25-01	包含層	調査区2	施釉陶器 皿	11.0	—	—	外面：ロクロケズリ 内面：ナデ	内外面：にぶい橙 (7.5YR5/4) 釉色：にぶい橙 (7.5YR5/4) 素地：灰白 (7.5YR7/1)	密	口縁部2/12		
128	22-01	包含層	1-L2	施釉陶器 瓶	—	—	底径9.6 体部最大径 17.9	外面：ロクロケズリ 内面：ロクロナデ、	素地：灰白 (2.5YR8/2) 釉色：黒褐 (7.5YR2/2)	～2.5mm以下の砂 粒含	体部4/12	内面にわずかな黒斑あり、内面底部付 近に鉄釉	
129	23-05	包含層	調査区1	陶器 播鉢	—	—	—	ロクロナデ	内外面：灰白 (2.5YR8/2)	～5mm以下の砂粒 含	小片	信楽、内面に筋目が2条あり	
130	21-01	Pit1	1-O3	陶器 鉢	—	—	—	外面：オサエ、ナデ 内面：ケズリ	内面：にぶい橙 (2.5YR6/4) 外面：橙 (2.5YR6/6)	～4.5mm以下の砂 粒含	口縁部小片	常滑、内面使用による摩滅	
131	21-05	Pit4	2-C4	陶器 鉢	—	—	—	外面：オサエ 内面：ナデ	内外面：橙 (5YR6/6)	6mm以下の小石粒 含	底部小片	常滑、外面にハケメ状の工具の使用し た痕跡がある	
132	21-03	Pit2	2-D3	陶器 鉢	—	—	—	外面：オサエ、ナデ 内面：ロクロナデ	素地：灰白 (2.5YR7/1) 錆跡：灰赤 (2.5YR5/2)	～3mm以下の砂粒 含	底部小片	内面使用による摩滅	
133	23-04	包含層	調査区1	陶器 甕	—	—	—	ロクロナデ	外面：黄灰 (2.5YR6/1) 内面：褐灰 (10YR5/1)	～2mm以下の砂粒 含	口縁部小片	風化が激しい	
134	24-01	包含層	2-C3	陶器 甕	23.0	—	—	ロクロナデ	外面：灰褐 (7.5YR4/2) 内面：灰褐 (7.5YR5/2)	～1mm以下の砂粒 多含	口縁部2/12残		
135	23-02	包含層	調査区1	陶器 甕	—	—	—	ナデ、オサエ	内外面：浅黄橙 (7.5YR8/4)	赤色粒含3.5mm以 下の砂粒多含	小片	常滑、焼成不良	
136	1-02	pit2	2-E4	木製 部材	—	—	—	—	—	ヒノキ亜科	縦2.9cm 横5.9cm	欠損箇所多くあり	
137	1-02	pit2	2-E4	木製 部材	—	—	—	—	—	ヒノキ亜科	小片		
138	3-01	pit6	2-C4	木製品 柱根	巾 9.2	厚さ 9.2	長さ 30.9	断面の部分に加工が施されて いる	—	—	サクラ節	長さ30.9cm	全体的に腐食が激しい、樹皮が残って いる
139	2-01	pit2	2-C4	木製品 柱根	巾 9.8	厚さ 7.9	長さ 27.8	断面の部分に加工が施されて いる	—	—	クリ	長さ27.8cm	全体的に腐食が激しい

第1表 遺物観察表

V. 自然科学分析

S E325出土の漆器（7・8）について塗膜分析および樹種同定、S E325出土の漆器（6）および柱穴状遺構出土の木製品（136～139）について樹種同定を行った。

1 塗膜分析

（1）分析内容

漆膜の断面観察を行った。また、赤色部分において蛍光X線分析による顔料分析を行った。

（2）使用機器

エネルギー分散型蛍光X線分析（XRF）装置 セイコーインスツルメンツ(株) SEA5230

試料の微小領域にX線を照射し、その際に試料から放出される各元素に固有のX線（蛍光X線）を検出することにより元素を同定する。

分析条件：モリブデン管球を使用し、管電圧45kV・コリメータφ1.8mm・大気圧下で120秒間X線を照射した。

生物顕微鏡 (株)オリンパス BX-50

金属顕微鏡 (株)オリンパス BH2-UMA

（3）方法

漆塗碗の内外面から漆膜を微量採取した。次に、微量採取した漆膜をエポキシ樹脂で包埋後、マイクロトームと研磨剤を用いて光が透過する薄い漆膜断面の切片を作製した。永久プレパラートを作製し、生物顕微鏡による透過観察および金属顕微鏡による落射・暗視野観察を行い、写真撮影を行った。

漆塗碗の赤色部分ではX線を照射しXRF分析を行い、顔料の種類を検討した。なお、7は資料を直接分析し、8は採取片を用いて分析した。

資料番号	実測番号	資料名	分析内容
7	4-1	漆塗碗	塗膜分析・樹種同定
8	1-1	漆塗碗	塗膜分析・樹種同定
6	4-2	漆塗鉢	樹種同定
136・137	1-2	指物片	樹種同定
139	2-1	柱材	樹種同定
138	3-1	柱材	樹種同定

第2表 分析対象資料および分析内容

（4）結果

漆塗碗（7） 漆塗碗の漆膜採取箇所を写真（P31）に丸印で示した。

漆膜断面写真を写真（P32）に示した。外面では、木地は観測されず、下地に木炭粉が観測され、その上に垂直の亀裂が入った茶褐色漆層、黄褐色透明漆層と垂直の亀裂が入った茶褐色漆層が観測された。内面では、木地は観測されず、下地に木炭粉が観測され、その上に茶褐色漆層、黄褐色透明漆層、赤色顔料を含む漆層と垂直の亀裂が入った茶褐色漆層が観測された。

また、XRF結果を第12図と第3表に示した。赤色部分の採取片から水銀が検出された。

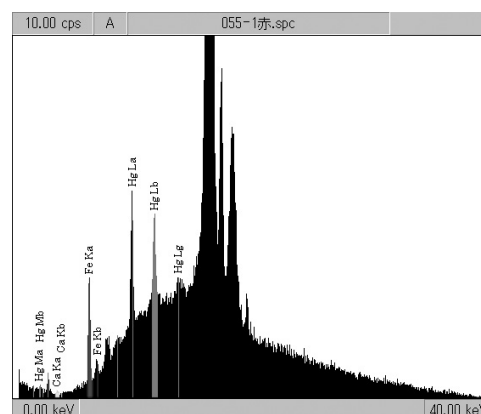
漆塗碗（8） 漆塗碗の漆膜採取箇所を写真（P32）に丸印で示した。なお、外面の赤色部分は残りが非常に少なく採取により消失するため、黒色部分のみを採取した。また、内面では赤色部分と黒色部分から採取した。

漆膜断面写真を写真（P31）に示した。以降、断面写真は左側が生物顕微鏡による透過観察の写真、右側が金属顕微鏡による落射・暗視野観察の写真である。

外面では、木地は観測されず、下地は木炭粉が観

Z	元素	元素名	ライン	A (cps)	ROI (keV)
20	Ca	カルシウム	K α	4.768	3.54- 3.84
26	Fe	鉄	K α	101.41	6.23- 6.57
80	Hg	水銀	L β	193.63	11.65-12.06

第3表 漆塗碗（7）の赤色部分におけるXRF結果



第12図 漆塗碗（7）のXRF結果

測され、垂直に亀裂が多数入った茶褐色漆層と表面が褐色に変色した黄褐色透明漆層が1層観測された。内面の赤色部分では、下地は木炭粉が観測され、垂直に亀裂の入った黒色層、黄褐色透明漆層、赤色顔料を含む漆層と垂直に亀裂の入った茶褐色漆層が観測された。また、内面の黒色部分では、下地は木炭粉が観測され、黒色層と表面が褐色に変色した黄褐色透明漆層が1層観察された。

また、XRF結果を第13図と第4表に示した。赤色部分の採取片から水銀が検出された。

(5) 考察

漆塗椀 (7) 断面観察の結果、外面では炭粉下地でその上に約13 μm の茶褐色漆層と約11 μm の黄褐色透明漆層、約8 μm の茶褐色漆層が観察された(写真P31)。

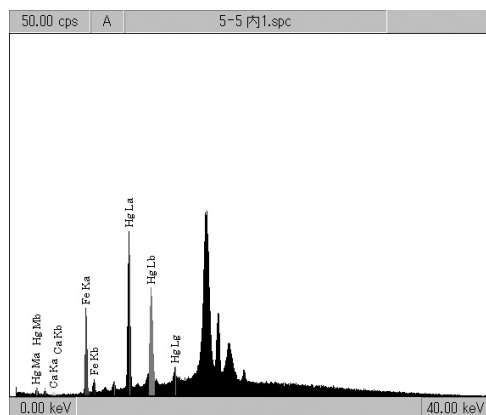
内面では、炭粉下地でその上に約5 μm の茶褐色漆層と約24 μm の黄褐色透明漆層、約6 μm の赤色漆層、約3 μm の茶褐色漆層が観察された(写真P31)。XRFの結果(第12図と第3表)、赤色顔料は朱と考えられた。

漆塗椀 (8) 断面観察の結果、外面では炭粉下地でその上に約10 μm の茶褐色漆層と12~20 μm の黄褐色透明漆層が観察された(写真P31)。

内面の赤色部分では、炭粉下地でその上に約13 μm の黒色層と約33~42 μm の黄褐色透明漆層、3~7 μm の赤色漆層、約3 μm の茶褐色漆層が観察された(写

Z	元素	元素名	ライン	A (cps)	ROI (keV)
20	Ca	カルシウム	K α	1.754	3.54- 3.84
26	Fe	鉄	K α	31.357	6.23- 6.57
80	Hg	水銀	L β	79.293	11.65-12.06

第4表 漆塗椀(8)〈赤色部分の採取片〉のXRF結果



第13図 漆塗椀(8)のXRF結果

真P31)。XRFの結果(第13図と第4表)、赤色顔料は朱と考えられた。内面の黒色部分では、炭粉下地でその上に約4 μm の黒色層と約7~15 μm の黄褐色透明漆層が観測された(写真P31)。

2 樹種同定

(1) 同定内容および使用機器

樹種同定に必要な木口面(横断面)、板目面(接線断面)、柁目面(放射断面)の3断面の切片を安全カミソリを用いて作製し、サフランで染色後、水分をエチルアルコール、n-ブチルアルコール、キシレンに順次置換した。その後、非水溶性封入剤を用いて永久プレパラートを作製し、生物顕微鏡(株)オリンパス BX-50)を用いて樹種同定を行った。

(2) 同定結果

各試料の木材組織は下記の通りである。以下に樹種同定結果とその根拠となる木材組織の特徴について記す。樹木分類および植生分布は『原色日本植物図鑑木本編』(II)に従った。

※ 樹木の性質、材の用途、出土事例等については後記の文献を参考とした。

漆塗鉢 (6) カバノキ属 *Betula* L.

(かばのき科 Betulaceae)

広葉樹、散孔材。木口面において直径約70~110 μm の管孔が2~3個、時に5~8個が放射方向ないし集塊状に複合する。軸方向柔細胞は散在状である。道管は階段穿孔を有し、側壁の壁孔が流れてラセン肥厚のように見える。放射組織は同性ないし異性II、III型で単列および3~5列幅が見られる。カバノキ属にはミズメ、ダケカンバ、シラカンバなどがある。

分布：北半球の温帯、亜寒帯に約40種。

樹形：落葉性の高木または低木。

用途：器具、家具、彫刻、櫛等。樹皮は刀の鞘、水桶、しゃく等。

出土事例：建築部材(柱材)、容器(漆器)、農具(鋤、鍬)等。

漆塗椀 (7) ブナ属 *Fagus* L.

(ぶな科 Fagaceae)

広葉樹、散孔材。木口面では直径約50 μm の管孔が密に散在する。管孔は単独もしくは2~3個の複合で晩材部付近では直径、数とも次第に減少している。

放射組織は2～4列幅または広放射組織が見られ、それらの多くは平伏細胞からなり、時に上下縁部に方形細胞がある異性である。道管は単穿孔と階段穿孔を有する。本試料も8と同様に顕微鏡観察による識別が困難であったためブナ属とした。

漆塗椀 (8) ブナ属 *Fagus* L.

(ぶな科 Fagaceae)

広葉樹、散孔材。木口面では直径約60 μ mの管孔が密に散在する。管孔は単独もしくは2～3個の複合で晩材部付近では直径、数とも次第に減少している。放射組織は2～5列または広放射組織が見られ、それらの多くは平伏細胞からなり、時に上下縁部に方形細胞がある異性である。道管は単穿孔と階段穿孔を有する。

ブナ属に入る樹種として、日本にはブナとイヌブナがある。本試料は顕微鏡観察による判断が困難であったためブナ属とした。

分 布：ブナ；北海道（南部）、本州、四国、九州。

イヌブナ；本州（岩手県から主として太平洋側、近畿地方、中国地方）、四国、九州、山中の森内に生える。

樹 形：ブナ・イヌブナ；落葉高木で樹高20～25m、胸高直径60～70cmに達する。

用 途：建築、器具、楽器、土木、船、轆轤細工、下駄、経木 等。

出土事例：土木材、刳物、挽物、杓子 等。

指物片 (136・137)

ヒノキ亜科 Subfam. Cupressioideae

(ひのき科 Cupressaceae)

仮道管と樹脂細胞、放射柔細胞からなる針葉樹材。水平樹脂道、垂直樹脂道は無い。樹脂細胞は晩材部に点在する。早材から晩材への移行は緩やかで晩材部の幅は狭い。放射組織は単列で2～6細胞高である。分野壁孔は1分野に1～2個見られるが、木材組織の劣化のため形は不明瞭である。よって、樹種の識別は困難なことからヒノキ亜科とした。ヒノキ亜科にはヒノキ属（ヒノキ、サワラ）、アスナロ属（アスナロ）などが含まれる。

柱根 (139) クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc.

(ぶな科 Fagaceae)

広葉樹、環孔材。直径約300 μ mの管孔が孔圏部に多くは単独で並ぶ。孔圏外で管孔の径は急激に減少する。孔圏外の小道管は薄壁で角張っており、単独あるいは2～3個が集まって火炎状に配列する。道管は単穿孔を有する。放射組織は単列で平伏細胞のみからなる同性である。孔圏部における管孔が連続して配列し、道管放射組織間壁孔が柵状ではない点からもクリと判断した。

分 布：北海道（西南部）、本州、四国、九州。

樹 形：落葉高木。樹高17m、胸高直径80cmに達する。

用 途：器具、農具、船、薪炭 等。

出土事例：建築材、土木材、容器（挽物・刳物）、炭化材 等。

柱根 (138)

サクラ節 *Prunus* L. Sect. *Pseudocerasus* Koehne

(ばら科 Rosaceae)

広葉樹、散孔材。多くは直径約50 μ m時に70～80 μ mの管孔が3～4列ときに5～6列複合して年輪内に均等に散在する。道管は単穿孔を有し、ラセン肥厚が見られる。また、道管内には着色物資が見られる。放射組織は同性から異性で平伏細胞およびその縁辺部に方形細胞がつく。道管放射組織間壁孔はやや小さく多数である。

分 布：主として温帯。アジア東部に多い。

樹 形：落葉または常緑の高木または低木。

用 途：建築材、器具材、せん作材（ろくろ細工）等。

出土事例：建築部材（柱、梯子）、版木、木錘、下駄、容器（盤）等。

[参考文献]

- ・ 北村四郎・村田源『原色日本植物図鑑・木本編』Ⅱ 1979年
- ・ 島地謙・伊東隆夫『図説木材組織』 1982年
- ・ 島地謙・伊東隆夫『日本の遺跡出土木製品総覧』 1988年
- ・ 伊東隆夫「日本広葉樹材の解剖学的記載」Ⅰ『木材研究・資料』第31号 1995年
- ・ 伊東隆夫「日本広葉樹材の解剖学的記載」Ⅲ『木材研究・資料』第33号 1997年

VI. 結 語

わずか300㎡と比較的狭い調査区であったが、今回の北奥遺跡の第3次調査で室町時代を中心とした中世の遺跡を確認することができた。しかし、室町時代とした遺構には鎌倉時代の遺物の混入が多く、近世遺物の混入するものも散見される状況である。さらに小片が多く、器形や口径について推定部分が多い。このため時期決定に不安定要素が多いことを予め確認しておかざるを得ない。

当地域の土師器皿については下川遺跡の発掘調査報告書において分類されている^①。それに従えば、内面に稜をもつ2・3・41・52・54は皿Cに分類されるものである。内弯気味に開く口縁部の10・42・55は皿Bに分類されるもので、両者が土師器皿の中心的な形態であることは下川遺跡の状況と同じである。両者の成立は15世紀後半とされ、16世紀まで存続するとされるが、口径が10cmを超えるものが多く16世紀には下らない可能性^②がある。他には、31・32・48・81が内弯する口縁部をもち、南勢方面で出土例の多いものである。伊藤氏の分類による皿B形態のIV a 期前後^③と思われ15世紀後半の時期が考えられている^④。一方、煮炊具では器形全体が分かるものがなく不明確ではあるが、土師器の羽釜口縁部の内傾が認められないもの(4・60)があり、16世紀に下るもの^⑤が含まれるものと思われる。ここでも59をはじめとして南勢方面で出土例の多い土師器鍋も目立つ状況である。各形式があるが4段階のものが多く、15世紀後半から16世紀の時期が与えられている^⑥。陶器の鉢では口縁端部が内にも拡張されており、常滑の10から11型式に相当し15世紀後半～16世紀前半に想定されている。以上から、今回の調査で検出された遺構は、15世紀後半から16世紀にかけての時期が中心と考えられ、下川遺跡の時期と合致することになる。

遺跡の性格は不明とせざるを得ないが、根石をもつSK311や柱根(138・139)があることから掘立柱建物の存在は推定可能で、集落跡であることは相違ない。下川遺跡では石組みを伴うSK322に類似した土坑も下川遺跡で検出されており、鍛冶遺構のひとつとして推定されている。下川遺跡では焼土や炭を

含む土坑や石組みを伴う土坑、フイゴ羽口・鉄滓の出土等により鍛冶関係の遺構・遺物が広範囲に分布し、相当広く大規模な鍛冶が行われていたことが推測されている^⑦。今回の調査でも石組みを伴うSK322や炭塊が出土したSD321があり、鍛冶遺構が北奥遺跡東端まで広がる可能性を得たことになり、鍛冶関係の大規模な集落の存在が垣間見えつつある状況となった。15世紀後半から16世紀にかけては雲林院城が機能していた頃であり、『三国地誌』が伝える刀工雲林院包永の居住の時期にもあたる^⑧。この大規模な鍛冶集落と刀工集団を結びつけることも無理のない状況となりつつある。

〔註〕

- ① 三重県埋蔵文化財センター『伊勢寺廃寺・下川遺跡ほか』1990.3
- ② 伊藤裕偉「中北勢地域の中世土器」『三重県史 資料編 考古2』 三重県 平成21年3月31日
- ③ 伊藤裕偉「南伊勢・志摩地域の中世土器」『三重県史 資料編 考古2』 三重県 平成21年3月31日
- ④ 前掲②に同じ
- ⑤ 伊藤裕偉「中世南伊勢系の土師器に関する一試論」『Mie history vol.1』 三重歴史文化研究会 1990.5
- ⑥ 中野晴久「赤羽・中野「生産地における編年について」」『全国シンポジウム「中世の常滑焼をおって」資料集』日本福祉大学知多半島総合研究所 1994年7月
- ⑦ 前掲①に同じ
- ⑧ 芸濃町教育委員会『芸濃史上巻』昭和61年6月30日



調査前風景（東から）



調査区1全景（東から）



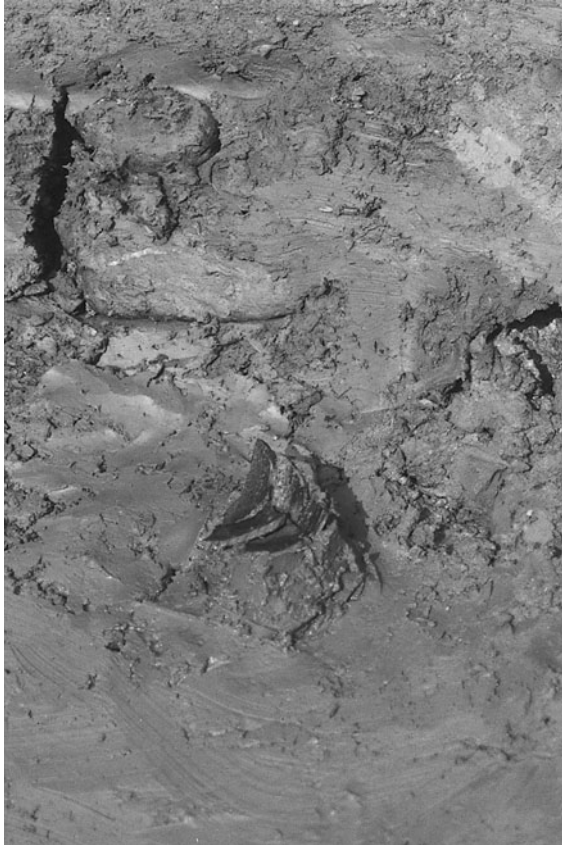
SE327 (東から)



SK322 (東から)



調査区2 全景（東から）



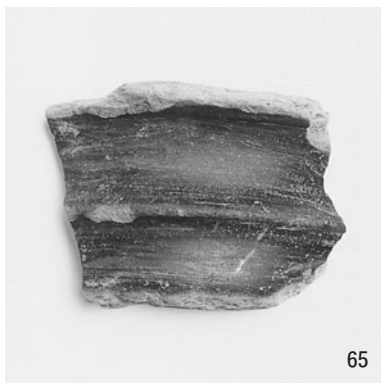
木製椀（7）出土状況（南から）



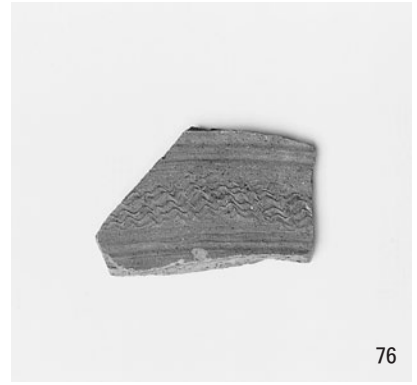
木製椀（8）出土状況（南から）



SE 325（南から）



出土遺物



出土遺物

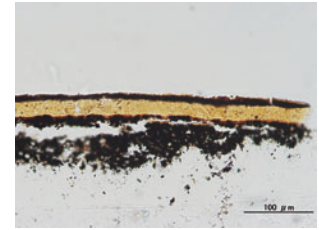


出土遺物

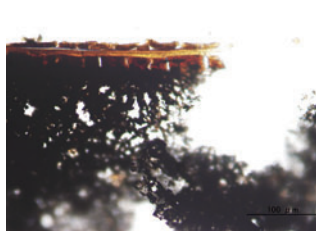
漆塗椀 (7)



漆膜採取箇所 外面 XRF測定箇所 内面

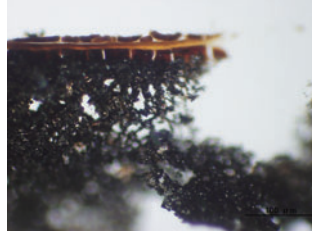


透過

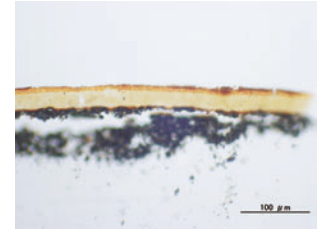


透過

外面の漆膜断面



暗視野



暗視野

内面の漆膜断面

漆塗椀 (8)



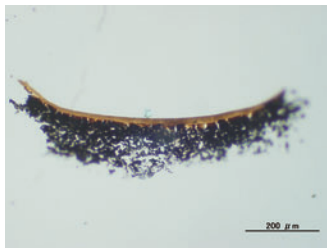
漆膜採取箇所 外面



赤色部分
黒色部分
内面

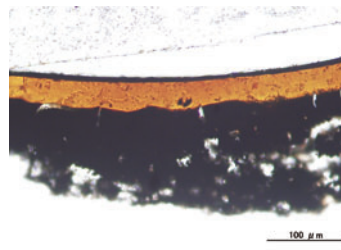


透過

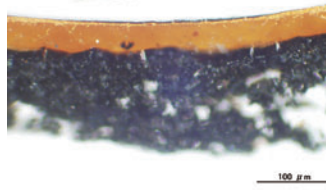


落射・暗視野

外面の漆膜断面

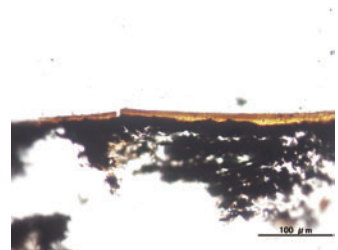


透過

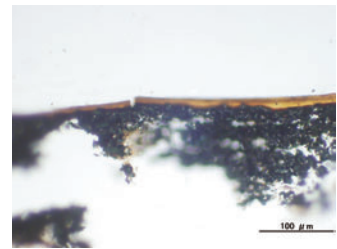


落射・暗視野

赤色内面の漆膜断面



透過



落射・暗視野

黒色内面の漆膜断面

漆塗鉢 (6)

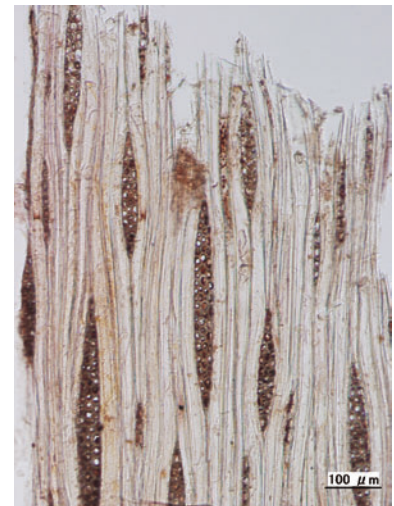


木口面



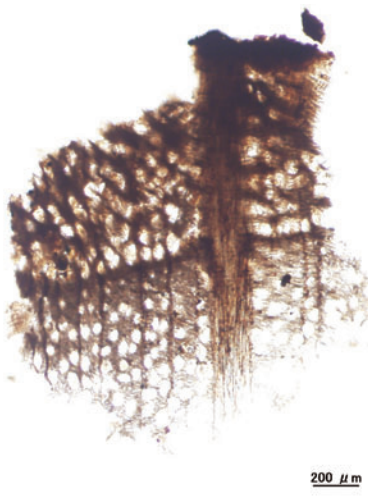
柁目面

カバノキ属 *Betula* L.



板目面

漆塗椀 (7)

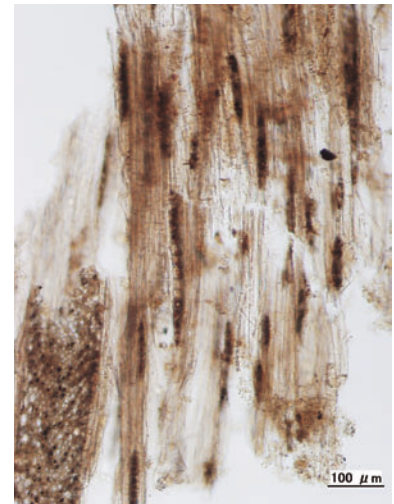


木口面



柁目面

ブナ属 *Fagus* L.

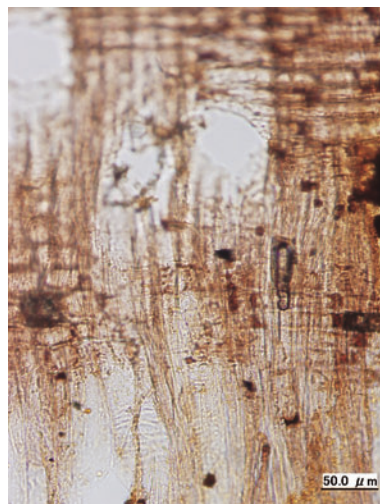


板目面

漆塗椀 (8)

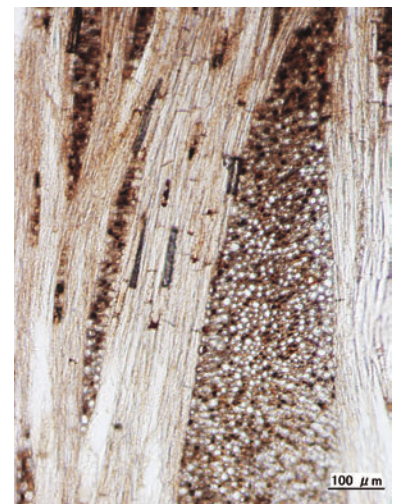


木口面



柁目面

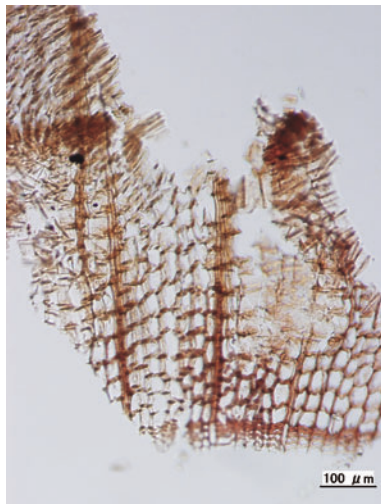
ブナ属 *Fagus* L.



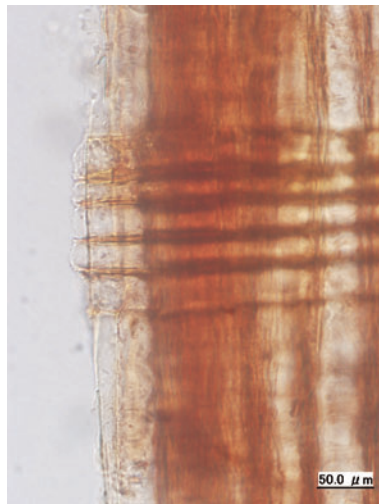
板目面

木材組織顕微鏡写真

指物片 (136・137)

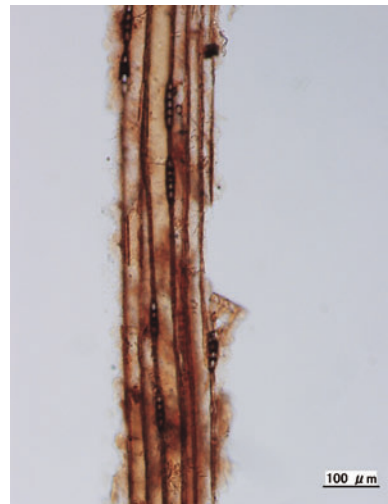


木口面



柁目面

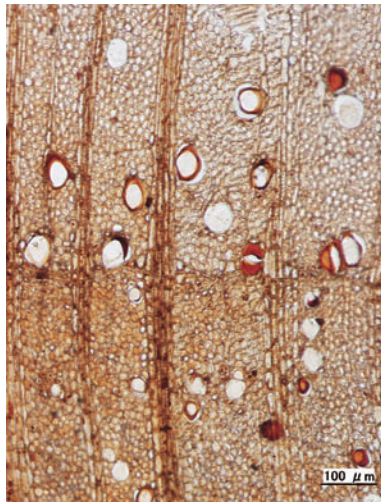
ヒノキ亜科 Subfam. Cupressioideae



板目面

柱材 (138)

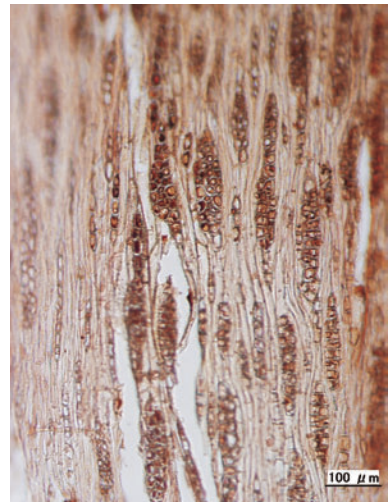
サクラ節 *Prunus* L. Sect. *Pseudocerasus* Koehne



木口面



柁目面



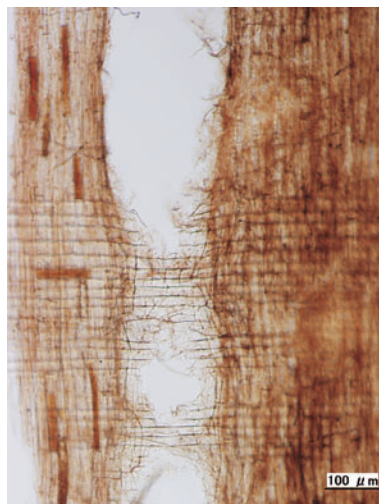
板目面

柱材 (139)

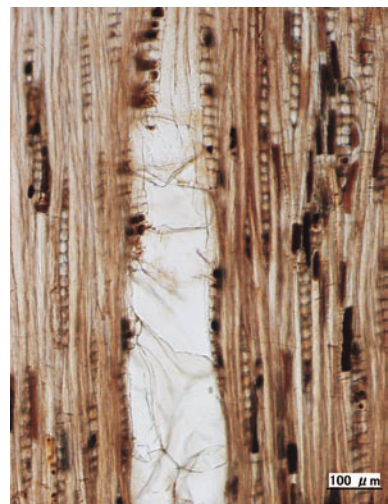
クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc.



木口面



柁目面



板目面

木材組織顕微鏡写真

報 告 書 抄 録

ふりがな	きたおくいせき (だい3じ) はつくつちょうさほうこく							
書名	北奥遺跡 (第3次) 発掘調査報告							
副書名								
巻次								
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	322							
編著者名	岩脇成人							
編集機関	三重県埋蔵文化財センター							
所在地	〒515-0325 三重県多気郡明和町竹川503 TEL0596 (52) 1732							
発行年月日	西暦2010年10月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町	遺跡番号					
きた おく い せき 北奥遺跡	つ し げいのうちょうたもん 津市芸濃町多門	24201	d76	34度 48分 17秒	136度 24分 57秒	20090829 ～ 20091110	300m ²	(主)津芸濃 大山田線道 路改良事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
北奥遺跡	集落跡	室町時代	土坑、溝、 井戸、谷状 遺構	土師器 (皿・羽釜・ 鍋)、山茶椀、 陶器 (鉢・甕)、 須恵器 (蓋・杯)、 青磁椀、白磁椀、 木製椀・鉢、柱根		弥生前期甕 片あり		
要約	北奥遺跡は三重県中央部の安濃川中流右岸の河岸段丘上に位置する。井戸、土坑、溝が検出されたが、まとまった遺物の出土はない。遺物から推測すると、室町時代の遺構と考えられるが、鎌倉時代の遺物も多く混入し、近世に下るものも散見される。石組を伴う土坑は1次調査の結果によると鍛冶遺構の可能性があり、炭塊が出土した溝も確認されていることから鍛冶集落の広がりが見定できる。							

三重県埋蔵文化財調査報告 322

北奥遺跡（第3次）発掘調査報告

2010（平成22）年10月

編集 三重県埋蔵文化財センター
発行
印刷 光出版印刷株式会社
